
ねみみに水の吸血樹

沙φ亜竜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ねみみに水の吸血樹

【Nコード】

N1431Y

【作者名】

沙φ亜竜

【あらすじ】

とある中学校の一年六組の教室を、吸血樹きゅけつぎと呼ばれ、怖い噂がささやかれる大樹が貫いていた。

そのクラスに在籍する、おとなしい女の子、仲良友樹なからゆき。彼女は、お嬢様である松園寺冬野しょうえんじとうのとその取り巻きによって呼び出され、いじめ行為を受ける。

泣きながら教室に戻った友樹の前に、ねみみという少女が現れた。彼女はこの教室にある大樹の精霊なのだという。

精霊の力でクラスの一員となったねみみは、友樹の友達になる。彼

女とともに、友樹は少しばかり穏やかな学校生活を送れるようになったのだが――。

辺りには深々とした山影が見え、ちょっぴり寂しい雰囲気が漂っている。

一応関東圏内ではあるものの、都心へと出るためにはかなりの時間を要する、通勤するにはなかなか不便な場所に、とある田舎町があった。

田舎町とはいえ、村ではない。微妙なラインではあるが、そこがこの人数の住民たちが暮らしているようだ。

そんな山間部の田舎町に、ごくごく普通の中学校があった。

この町には、中学校がひとつしかない。だから、町中の中学生がこの中学校に通う。

そのため、田舎町にある古い中学校ながらも、それなりの生徒数を有していた。

どうやら随分と歴史がある、伝統深い中学校らしい。

というわけで、何度も補修工事をされてはいるのだが、オンボロ校舎といった印象は否めない。

そのオンボロ校舎の最上階、四階にある一年六組の教室で、今、ごくごく普通に朝のホームルームが始まろうとしていた。

この学校では、一年生の教室が最上階にあり、下の階に行くに従って学年が下がっていく。

中学校は三年生までなのに、どうして四階まであるのかというと、一階には職員室や保健室などがあるからだ。

校舎としては特別教室棟というのが別にあるのだが、そこは理科室や家庭科室といった特殊な教室のみで構成されている。

今日は暖かい五月晴れの空が一面を包み込み、若干汗ばむくらいの陽気。

生徒たちがプラスチック製の下敷きをうちわ代わりに風を起こす、ぺによぺによといった音が教室内にこだましている。

共学の学校ではあるが、まだ小学生気分が抜けていないからか、そういうことに無頓着なだけのか、スカートをパタパタと揺らして涼しい風を送り込む女子もちらほらと見受けられた。

「こら、女子！ はしたないぞ！」

教壇に立つ女性教師が、教卓に両手を着きながら可愛らしい声を上げて注意を促す。

実際に注意を受けるべきなのは女子の一部だけなのだが、学校という場所は連帯責任が基本なのか、まとめて注意されることが多い。その際、たいていは女子か男子かで二分される。

まだまだ男子は子供で、女子のほうが成長も早いいため少々大人っぽかったりするこの年代。

怒られるのはだいたい男子だったりするのだが……今日は違っていたようだ。

「みんな、シャキツとしなさい！ 若いんだから、五月病なんかに負けてちゃダメだぞ！」

こぶしをぐつと握りしめて力説する教師。

……と、次の瞬間。

へにやつ、という効果音が背景に見えるほどの動作で、彼女は教卓にその身をつ伏してしまう。

「……でも先生はもう若くありません。暑さは正直つらいです。ということで先生はクーラーの効いた職員室に戻ります。みなさん今日も一日頑張ってください。……この暑い中。以上、ホームルーム終わりっ！」

素早くそう言い終えるやいなや、そそくさと教室を出ていった。まいった。

「……きりっつ、きをつけ、礼」

すでに先生はドアをピシヤリと閉めて廊下を歩いているところではあったが、一応日直が号令をかけ、ホームルームは終わりを告げる。

あの教師はなんなんだ？ やる気あるのか？
そんな声が聞こえてきそうな状況ではあるが、生徒は生徒で慣れたもの。とくに気にした様子もない。

普段からこんな感じなのだ、あの先生は。

それにしても、五月の陽気であんなふうになっていたのだから、はたして夏になったらどうなってしまうのか。先行き不安としか言いようがない。

もりもれあん
森母礼音先生。もう若くないなど言っではいたが、まだ二十三歳で、教育大学を出て教師となっただけの先生だ。
教師生活一ヶ月半程度にして、あそこまでだらけることができるというのは、ある意味すごい才能なのかもしれない。

ここまでの説明と彼女の態度を見る限りでは、ただのダメ教師としか思えないだろう。

ところがどっこい、世の中とは不思議なもので、生徒たちには絶大な人気があったりする。

若い女性教師だから男子に人気がある、というわけではない。いや、もちろん男子にも人気はあるのだが。ただ、どちらかといえば女子に人気で、友達感覚でつき合える先生という印象のようだ。

適当なところや、のほほんとした雰囲気、彼女たちにウケているのだろうか。

……単純に精神年齢が低いから、本当に友達という感覚になるだけなのかもしれない。

ともかく、ホームルームが終わった教室。

先生がいなくなれば、みんな騒ぎ出すのは世の中の摂理と言っても過言ではないだろう。

もつともあの先生の場合、たとえ目の前にいたとしても生徒を黙らせるほどの威厳があるとは思えないが。

教室内は、まだあどけなさの残る中学一年生たちの明るい声でいっぱいとなった。

そんな教室の片隅、窓際の一番後ろの席に、ひとりの女子生徒が静かに座っていた。

はしゃいだ声が周囲に響く中、カバンからおもむろに取り出した文庫本を読みふける。

それが、仲良友樹なからゆきという名の、どこのクラスにでもひとりはいるような、おとなしい女の子だった。

このクラスにはひとつの大きな特徴がある。このクラスには、と言つより、この教室には、と言つべきか。

ぺら。

休み時間のたびに友樹が文庫本のページをめくる、その乾いた音が微かに響く教室の片隅。

彼女の席のすぐ後ろに、その大きな特徴となっている、あるものが存在していた。

教室の窓側にはベランダに出るためのスライドドアがあるが、後ろにあるほうのドアの、奥側の一枚。その手前に、圧倒的な存在感を持って、それは立ち塞がっている。

教室の床を突き破って伸びる、直径メートルくらいはあろうかという蛇行したうねりを伴った円筒形の物体。

その物体が、教室の床を突き破って侵入し、そのまま天井までも貫いていた。

それは、一本の大きな樹の幹だった。

樹齡がどれくらいなのか想像もつかないほどの大樹が、教室の片隅を貫いて立っている。

相当インパクトのある光景に思えるが、慣れてしまえばどうということはないのだろう。五月も半ばともなるこの時期には、すでにクラスの誰も気に留めなくなっていた。

この教室は四階にあるわけだが、その真下にあたる教室は空き教室となっている。三階だけではなく、二階も、一階もだ。

それはもちろん、大樹が貫いているからに他ならない。

大樹は少々うねりながら、校舎を斜めに貫いている。そのため、下の階に行けば行くほど、教室の中央付近に大樹の幹が存在することになる。

というわけで、教室として使用されてはいない。

ただ、教室の数が足りなかったため、教室の隅にしか樹の幹が存在しないこ一年六組だけは、大樹が貫く珍しいクラスとして存在することになったのだ。

この大樹には、少々怖い噂話があった。

よくある学校の怪談の一種、ということになるだろうか。

遙か昔、恋人に捨てられて自暴自棄になった女性が、手首を切つて自殺した。

手首から流れ出た血は一ヶ所に溜まり、そこから一本の樹が生えてきた。

女性の怨念を養分として、その樹は大きく育った。

それがこの教室を貫く樹なのだという。

学校を建てる際に切り倒そうとしたものの、そのたびに天変地異が襲い、結局切り倒すことはできなかった。

工事期間は限られていたため、やむなく樹の上にそのまま校舎を建てた。

教室を貫くように存在するその樹は、最初は物珍しさから生徒た

ちにも歓迎されていた。

しかしいつしか、不穏な出来事が発生し始める。

その樹の近くで恨みのこもった言葉を発した生徒が、次の日には失踪するというものだった。

生徒の失踪があつてからしばらくすると、樹の幹から赤い液体が溢れ出した。

樹に宿った女性の怨念が生徒の恨みの念と同調し、その生徒を幹の中へと引きずり込んだ。そしてそのまま、吸収してしまったのではないか。

そう言われるようになった。

しばらくして、失踪した生徒の遺体が学校の外の林で見つかった。当たり前のことではあるが、生徒の失踪は、この樹のせいではなかったのだ。

しかし結局、犯人は見つからないまま。

その上、樹の幹から流れた赤い液体のこともある。

やがて、失踪した生徒の死因が、失血死だという話が流れ出す。すると生徒たちは次第に、この樹が生徒の血を吸ったんだ、だから赤い液体が流れていたんだ、と噂するようになっていった。

以来この樹は、「吸血樹きゅうけつじ」と呼ばれている。

それからもたびたび血を吸われて失踪する生徒がいたと、そんな話が、まことしやかにささやかれていた。

吸血樹の近くでは恨みのこもった言葉を、冗談でも言ったりしないこと。

今でも生徒たちは、そう言い聞かされている。

そんなおどろおどろしい噂を持つ樹が教室を貫くこのクラス。

入学して最初のホームルームの際には、生徒たちの席は名前の順に並んでいた。

しかし、「名前の順なんて味気ないよね」という先生の提案で、いきなり席替えをすることになった。

そういう場合、普通ならくじ引きなどをして決めるところなのだろうが、そこは適当な森母先生のことだ、面倒な準備なんてするはずもない。

好きな席に座っていいよ、と投げやりに言い放つと、彼女は教室の隅で椅子に座って休憩に入る。

生徒たちは少々面食らいながらも、ま、好きな場所を選んで座っていいこう、と秩序もなにもなく、自然と早い者勝ちで席を取っていくことになった。

そんな中、おとなしい友樹は積極的に動くことができずにいた。どこがいいか決めかね、おろおろしているあいだに、もうすでに最後の一ヶ所しか残っていないという状態になっていたのだ。

こういう場合、教卓の真ん前の席も残ったりしていそうなものだが、担任が若い女性教師だからなのか、その辺りには男子生徒が陣取っていた。

噂の吸血樹がすぐ背後にある席ということで怖がられ、窓際の一番後ろという好条件にもかかわらず、この席だけ残ってしまったのだらう。

そんな経緯で、ここが友樹の席となった。

そしてこの席替えが、友樹にとっての最初の不運となる。

彼女の前の席と隣の席に、男子が座っていたからだ。

引っ込み思案な性格の友樹には、男子に話しかけるなんてことができるはずもない。

反対に隣や前の席の男子はどうだったのかというと、女子と気軽に話すことが恥ずかしいからなのか、やっぱり彼女に話しかけたりはしてこなかった。

だからといって、席を立てて他の女子たちが話している輪に入っていくことも、友樹にはできなかった。

その結果、友樹には友達ができず、休み時間は読書に興じるといふ今日この頃になってしまっていたのだ。

彼女の席のすぐ後ろには、吸血樹がそそり立っている。ぺら。

友樹は不気味さすら漂う大樹を背に、今日もひとり寂しく本を読みふけていた。

学校の机というものは、何年も使われるものだ。

ましてやここは、余分な運営資金もない山あいの田舎町に建つ学校なのだから、それはなおさらだった。

そして、長年使われていると、落書き程度は当然のこととして、授業中の暇つぶしにシャープペンの先などを使って穴を掘られてしまふ机も、結構あるものだろう。

友樹の机の端っこのほうには、そんな穴があった。

大きな穴、というわけではない。

ただ少し気になるのは、机の上板を斜め方向に完全に貫いているということだ。

椅子に座って穴に目を向けると、床板のくすんだ木目が見える。

錐やコンパスの針なんかを使って、わざわざ貫通させてできた穴なのだろう。

興味のない暇な時間に、ついつい夢中になって掘ってしまった、そんなところか。

しかし今日の友樹は、その穴についてさらに気になる部分を発見していた。

「あれ？ 穴の周りがすすけてる……？」

友樹がつぶやいた言葉のとおり、彼女の机にある穴は、周囲が少し黒く変色しているようだった。

（昨日までは、黒くなかったと思うけど……）

首をかしげる友樹。

（もしかしたら……これって、いじめ？　ボク、こんな状態だし、いじめられても不思議ではないよね……）

友樹は一旦そう考えてから、それを否定する。

（いじめだったら、こんなわかりにくいし全然害もないこと、わざわざしないよね。きっとボクの気のせいだ。それか、教室掃除の人が雑巾で机を拭いたときに汚れが移ったのかも）

友樹はそう頭の中で結論づけた。

おとなしくて友達もない彼女。
今でこそ、そんな状況に甘んじているが、以前からそうだったわけではない。

友樹は小学校時代、九州地方のある住宅街に住んでいた。
その頃の友樹は、毎日楽しく小学校に通う、ごく普通の生徒だった。

もちろんそれなりに友達もいて、笑顔をこぼしてはしゃぎ回る活発さすら見せていた。

おとなしい性格自体はその頃から変わっていないのだが、周りの友人たちに引っ張られるように、楽しい輪の中に紛れ込んでいた。
要はタイミングと運、なのだろう。

友樹は小学校を卒業すると同時に、父親の転勤に合わせて今の学校のあるこの田舎町へと引っ越してきた。

そして気分一新、この中学校に入学したものの、タイミングと運が悪かったからか、はたまた神様のいたずらなのか、現在のような状態に陥ってしまったのだ。

とはいえ、友樹にまったく非がないとは言いきれないのかもしれない。

状況を好転させようという努力もせず、本でも読んで静かに過ごしていればいいやと、諦めの境地に自らの身を置いてしまっていたのだから。

そんなある日の、ホームルームの時間。

チャイムが鳴ったと同時に森母先生が入ってきて教壇に立ってもなお、生徒たちは無駄話をやめず、教室内には騒がしい声が反響し続けていた。

みんな席には着いていたものの、後ろを向いたり、隣の席の人と話したり、勝手気ままにはしゃいでいる状態だった。

バンツ！

「こら、みんな！ 静かにしなさい！」

とつても温厚な森母先生ではあったが、さすがに声を荒げる。黒板を平手で叩き、みんなの注目を集めてそう叫んだ先生だったのだが。

生徒たちの騒がしい声は、確かにほんの一瞬は静まったものの、

「わっ！ もりもんが怒った！」

すかさず男子生徒が茶化す声を上げると、どっとクラスが笑いに包まれる。

中学生とはいっても、いや、中学生だからこそか、生徒たちをまとめるのはなかなか大変なようだ。

男子生徒が言った「もりもん」というのは、森母先生のあだ名だ。そのままという感じではあるが、一応由来があった。なぜかマゲを結った可愛いモンスターの絵が描かれた人気カードゲーム「まげつとモンスター」からつけられたものだ。

モンスターには数値化された強さと、必殺技が書かれてあり、また、属性や特徴づけなどに工夫が施されている。カードは三枚を一セットとしてチームを組み、特殊カードと合わせて出すことで相手と戦う。

そういうゲームだ。

ゲームのタイトルにもなっている、一番人気の「まげつとモンスター」を筆頭に、かぎっこモンスターとか、まねっこモンスターとか、そういったネーミングのモンスターがたくさんいるらしい。

長い名前がつけられている場合、呼びやすいように略されるのが自然な流れだろう。それはこのゲームでも同じだった。

例えば先ほどのモンスターであれば、それぞれ、マゲモン、カギモン、マネモン、といった感じで略されることになる。

そんなカードゲームが、小中学生を中心に熱狂的なブームとなっていた。

ところで森母先生は、あまり長くない髪を無理矢理ポニーテール

にしている。

しっぽのように垂らすほどの長さはなく、いわばパイナップルみたいな感じだろうか。

それを見た生徒のひとりが、「マゲみたい」と言っただけで立ってた。その「マゲ」からまげつとモンスターを連想し、「もりもん」というあだ名がつけられたのも、至極当然の結果だったと言える。

「もりもん言うな〜〜〜!」

可愛らしい声を上げて、右手のこぶしをブンブンと振り回す森母先生。

そんな言い方をしたら余計に、生徒たちのいたずら心に火をつけるといふもので。

「もりもん、もりもん、もりもん!」

「怒りのもりもんパンチが来るぞ〜!」

などと、先生をからかう声が続いて繰り出されるのも、ごく自然な展開と言えるだろう。

「がるるる〜〜!」

「うあゝ、もりもんファイアーの前兆だ!」

「逃げる〜!」

教室には明るい笑い声と、先生の叫び声がこだましていた。

主に子供気分の抜けきれていない男子たちを中心に、若い森母先生をからかって楽しんでいる。

そんな様子も、ごくごくありふれた、このクラスの日常風景だ。

「あはははは……」

笑いの渦に包まれた教室の雰囲気は呑まれ、おとなしい友樹ですらも微かな笑い声をこぼすくらいに、平和な日常だった。

しかし、そんな平和で和やかな空気がこれから徐々に変わっていくことになるうとは、このときはまだ誰も思っていなかった。

帰りのホームルームを終えると、友樹はそそくさと教室を出た。いつもならカバンに教科書やノートを詰め込み、すぐに昇降口へと向かうのだが。

今の友樹は、手ぶらだった。

時間は少しさかのぼる。

トイレから戻ってくると同時に五時間目の休み時間が終わり、六時間目のために教科書とノートを取り出そうとした友樹は、淡い桃色の封筒が入っていることに気づいた。

……え？ これってもしかして、ラブレター？

一瞬そう思っただけで頬を染めたものの、隠れて中の手紙を読んでみた友樹は、愕然となる。

——放課後、ひとりで屋上前に来なさい。

つまりこれは、いわゆる呼び出しというやつだ。おとなしくてクラスで孤立している状態の友樹。そのうちそういうことだってあるかもしれない。友樹本人としても、その可能性を考えていないわけではなかった。でも、実際にこうしてその身に迫ってみると、どうしていいか思い悩んでしまう。

六時間目の授業なんて、まったく頭に入らなかった。思いきって、無視してしまおうか。

一旦はそう考えはしたものの、状況が余計に悪化してしまう可能

性もある。

覚悟を決めて、友樹は呼び出し場所へと向かうことにしたのだった。

手紙には差出人の名前は書いていなかったが、そこに待つのが誰なのか、ある程度の予測はついていた。

移動教室でもなかった休み時間に、机の中へ手紙を忍ばせる。

そんなことができるのは、クラスメイトをおいて他にない。

六時間目の終わりを告げるチャイムが鳴ると同時に、友樹はさりげなく教室内に視線を巡らせていた。

廊下側の席に座っていた元気なサッカー部の男子ふたりが、先生よりも早く教室の前のドアから飛び出した。

——あのふたりは、いつも真っ先に飛び出していくから、違うよね。

友樹はそう考えながらも、教室にふたつあるドアへと神経を集中させていた。こういう場合、教室の一番後ろの窓際の席というのは、非常に都合がよかった。

そんな中、続いて後ろ側のドアから四人組の女子が出ていく。

——あの四人だ！

友樹は直感的にそう思った。

そのあとは普段どおりの放課後の流れといった雰囲気で、あるいは部活に、あるいは家路にと、それぞれがドアをくぐって出ていった。

その流れに紛れるようにして、友樹も教室を出る。そして生徒たちの流れとは逆方向、昇降口へ向かうには遠回りとなる階段へと急

ぐ。

使われることの少ない四階の端のほうにある寂れた階段の、さらに使われることの少ない屋上へと続く上り階段を、友樹は重い足取りで一步一步踏みしめていた。

「遅かったわね」

階段を上りきる前に、凜とした声が響いた。

カギがかけられて開かないようになってい、屋上へと出るドアを背に、腕を組んで友樹を見下ろす女子生徒の姿。

彼女は松園寺冬野^{しょうえんじとうの}。全国展開しているデパート「松寺屋^{まつでい}」などを傘下に持つ松園寺グループの社長令嬢だ。

先ほどの声の主は、彼女だった。

彼女の前には家臣のごとく三人の女子がつき従い、友樹に鋭い視線を向けている。

間唯^{はなみゆい}、大和田幸緒^{おおわださちお}、坂本美春^{さかもとみはる}の三人だ。

いくらクラスに馴染めていない友樹とはいえ、クラスメイトだから名前は覚えていたし、彼女たちがいつも一緒にいるグループだというのも知っていた。

お金持ちのお嬢様と、その取り巻き。彼女たちは、そんな雰囲気だった。

「……なにか用、ですか……？」

同級生だというのに、敬語で言葉を返す友樹。
どんな目的で自分がここに呼ばれたのか、なんとなくは予想がついているのだろう。

だからこそ、無駄な波風は立てないようにしようという心理が働き、敬語での受け答えとなったのだろうが。
しかしそれが余計に、相手を調子づかせてしまう結果となる。

「なにか用ですか、だって！ あはは！」

「ほんと、あんたって暗いよね」

「クラスの雰囲気壊してるのよ、あんたの存在が」

取り巻きの三人が、罵声を投げかけてきた。

「ごめんなさい……」

ついつい謝ってしまう。

おとなしい性格の友樹には、下手に出ることしか対処するすべはなかったのだ。

だが、もちろんそんな友樹の態度も、彼女たちをつけ上がらせる火種にしかない。

「謝って済むんなら、警察はいらないっての！」

個性のかけらもないセリフを吐きながら、美春が友樹の腕をつかんで引き寄せる。

「きゃ……っ！」

友樹はそのまま階段の上へと引つ張られ、待ち構えていたかのよ

うに両手を広げていた幸緒によって、背中から羽交い絞めにされる。

「大声出しちゃ、ダメだからね」

ドアの前から動くことなく、取り巻きたちの行動をただ見守り続ける冬野。

「この子、胸、大っきーよね。いやらしー」

幸緒が羽交い絞めにしていた手を友樹の胸に押し当て驚づかみにする。

「や……、ちょ……っと、やめて……ください……」

声を押し殺して身をよじり、友樹はそう懇願する。

もちろんそんな様子も、彼女たちには逆効果になるわけだが、今の友樹にそこまで考えられるような余裕などない。

「写真撮っちゃおう！ 幸緒、ブラ外しちゃえ！」

唯はケータイを友樹に向けて構える。

ケータイの持ち込みは校則違反なのだが、こんな田舎町の中学校とはいえ、実際にはほとんどの生徒が持ってきているのが実情だった。

もっとも、友樹は今どきにしては珍しい、ケータイを持っていない中学生なのだ。

「おっけー！」

幸緒は唯に言われたとおり、友樹のセーラー服の裾を強引にまく

り上げると、手を背中に滑り込ませていく。

友樹の両腕は目の前にいる美春によって押さえつけられていたため、身をよじるくらいしか抵抗するすべはなかった。もちろんそれは、無駄な抵抗でしかない。

「や……だ……、やめ……て……」

涙目になる友樹に、唯はしつこくケータイのカメラを向ける。

「写真撮ったら、クラスの男子にばら撒いちゃおうか！」

「いいね、それ。あつ。男の先生とかにも、送りつけちゃおう！」

口々に好き放題言いながら、友樹を追い詰める三人の前で、

「う……ぐ……やめ……て……ひっく、ひっく」

友樹はぼろぼろと大粒の涙を流し、泣き始めた。

沈黙の時間が流れる。

抵抗することなく崩れ落ちるほどの友樹の様子に、さすがの取り巻き三人組も少しうろたえ始めていた。

ちよつとからかってやろう、最初はそんなつもりだったに違いない。だが、次第にエスカレートしてしまった。そんなところなのだろう。

大声を上げたりはしていないものの、友樹の涙は止め処なく溢れ出してくる。

ケータイのカメラを向けたままの唯も、セーラー服の中に手を突っ込んだままの幸緒も、腕を押さえつけている美春も、どうしていいかわからなくなってしまったようで、ただ呆然と慌てた視線を友

樹に向けていた。

その様子を落ち着いた面持ちで眺めていた冬野は、ずっとドアから身を離す。

「もう、ちょっとした冗談だってば。なに泣いてんのよ」

彼女は三人の取り巻きたちを下がらせると、友樹のセーラー服の裾を引き下ろし、あわらになっていた肌を隠す。

「松園寺さん……ひつく……」

「言っとくけど、告げ口なんてしたら、ひどいことになるからね？」

冬野は友樹を睨みつけるようにそう言い捨てると、取り巻き三人を従えて逃げるように階段を下りていった。

あとにはただひとり、まだ少し服装が乱れたまま頬を濡らす友樹だけが、ドアの窓から夕焼けの赤が微かに差し込むこの寂れた場所に取り残されていた。

「ひつく……」

夕陽が教室の中を黄昏色に包む。

友樹はとぼとぼと階段を下り、カバンを取りに教室へと戻ってきていた。

勢いこそ弱まったものの、まだ彼女の涙は流れ続けている。

教室にはもう誰も残っていなかった。

そうでなかったら、彼女は涙に気づかれないよう、顔を隠して教室へと入っただろう。

泣き顔を隠すこともなく、友樹はまっすぐ自分の席へと向かう。窓から差し込む夕陽に赤くきらめく雫が、頬を伝ってふた筋の川を形成していた。

夕方とはいえ暖かな五月の陽気、すぐにその川は枯れて見えなくなってしまうに違いない。

誰もいない教室の一番後ろ、窓際にある自分の席に着く。

まだ帰り支度を整えていなかったからだ。

友樹はのそのそとゆっくりとした動作で机の中に手を入れ、教科書とノートを取り出す。

誰もいないはずの教室の一番後ろ、窓際にある友樹の席。彼女の背後には、教室を貫く大樹しかないはずだった。

だが――。

すっ……と。

二本の腕が、彼女の首筋から前へと伸びていく。

きゅっ。

二本の腕に抱きしめられた友樹は、背中に確かな温もりを感じていた。

実際に後ろから誰かが抱きしめてくれているかのように。

「大丈夫？」

不意に耳もとで声が奏でられた。

「……うん」

素直に、そして自然に、友樹はその声に答えていた。

「ウチは、ねみみと申しますねん」

目の前の女の子が自己紹介を始めると、思わず友樹のほうも自己紹介を返した。

「はぁ……。ボクは、仲良友樹です」

「あは、自分のことを、ボクって言う女の子なんですのんね。希少価値狙いですのん？」

呆然とした表情を浮かべている友樹に、明るい笑顔を向けて質問攻めを始める、ねみみと名乗った女の子。

自分のことを「ウチ」と言う女の子も、少なくともこの近辺では同じように希少価値ではないかと思うのだが。

それはともかく、返す言葉が見つからない様子の友樹に向けて、ねみみはさらに喋り続ける。

「そうでした。名乗るときには名字というの必要なのでしたね。ウチは倉梳^{くらかき}ねみみ。この樹に宿る精霊をやっておりますねん」
「はあ……………は？」

条件反射のように生返事を繰り返していた友樹だったが、ここでさすがに疑問符を飛ばす。

泣き疲れてぼーっとした頭をフル回転させ、必死に考えを巡らせながら、友樹は目の前の女の子をじーっと見つめる。

にこっ。

女の子はそんな友樹に微笑み返した。

この、樹に、宿る、精霊、を、やって、おり、ます、ねん。

さっきのねみみの言葉を、友樹はゆっくりと区切りながら頭の中で反芻する。

後半は助長ではなかるうか、などというツツコミを入れたくなるような思考回路ではある。

しかし今の友樹は、それほどまでに混乱しているということだろう。

もっとも友樹は、普段から少々ズレた思考回路を持った、若干天然ボケ気味な女の子だったりするのだが。

[illegible]

数秒後になってようやく理解できたようで、友樹は唐突に大声を上げる。

そのあまりの大声に、精霊だとのたまう、ねみみという女の子も、耳を押さえてしかめっ面をしていた。

「精靈……」

ねみみを指差し、口をパクパクさせて啞然としている友樹。そんな彼女に再び笑顔を向けると、ねみみはこう言い放った。

「ウチのすぐ前の席になったのも、なにかの縁。これからもお見知りおきを、ですのん。お近づきの印に、明日からお友達になってあげますねん」

「はあ……」

再度、生返事しか口をつかない状況に陥ってしまった友樹ではあったが、このときにはすでに、涙なんて綺麗さっぱり、どこか遠く空の彼方へ飛んでいった。

これが、友樹とねみみと出会いであり、このクラスで繰り広げられる事件の始まりでもあったのだが。

おかしな状況だと頭では理解していたものの、このときの友樹は、

友達になつてくれるという優しい言葉とねみみの明るい笑顔によつて、温かい気持ちに包まれていた。

そのため、この樹が「吸血樹」と呼ばれているという怖い噂話すらも、彼女はすっかり忘れてしまっていた。

次の日、いつもどおりの重い足取りで教室に入ってきた友樹は、教室の雰囲気がいっつもどおりではないことに気づく。

普段から朝のホームルーム前は騒がしいことが多かったが、今日の騒がしさはベクトルが違っているように思えた。

だが、友樹は大して気にも留めず、自分の席へとすたすたと歩いていく。

クラスに馴染めていない彼女にとっては、なにが起こっていたとしても自分には関係ないと決めつけていたのだ。

ただ今回ばかりは、そうもいかなかった。

なぜならば、騒がしい声の発生源が、友樹の席のすぐそばだったからだ。

正確には、友樹の席の後ろということになる。

友樹の席の後ろ――。

そう、あの「吸血樹」が床から天井まで貫いている教室の片隅だ。

その樹のすぐ前、友樹の席の後ろに、昨日まではなかったはずの机と椅子が置かれ、ひとりの女の子が座っていた。

学校指定のセーラー服を身にまとう彼女は、昨日友樹がお話した女の子、ねみみだった。

少々幼い外見なのだが、誰もこの学校の生徒だと信じて疑っていない様子。

彼女の周りには、主に男子生徒が集まっていた。

そしてねみみは彼らにグラスを渡し、これにお水を入れて持って

きて、とお願いする。

お姫様に仕える従者よろしく、ひとりの男子がそのグラスを手に取り、足早に教室を出ていった。

「ねみみ様、他になにか御用はありませんか？」

「そうねえ。お菓子が食べたいですのん。なにかお持ちじゃありませんですか？」

「あつ、おれ、チョコ持ってきてるよ！」

「……うーん、溶けかけてますのん。いらないです」

「ごめんなさい、ねみみ様っ！」

そんな状況が目の前で展開され、思わず口をだらしなく開け放ち、呆然と立ち尽くしてしまう友樹。

と、彼女の横を、大急ぎの男子が通り過ぎる。

「はいっ、お持ちしました、ねみみ様！ お水です！」

「ありがとうございますのん」

先ほどグラスを渡された男子が駆け足で戻ってきたのだ。

グラスを受け取ったねみみは、中の水を美味しそうに飲み干す。

「ごきゅ、ごきゅ、ごきゅ、ぷふあー！ やっぱ、お水は最高ですのん」

「はいっ、水は最高です、ねみみ様！」

友樹は……とりあえず現実から目を逸らして、黙ったまま自分の席に着くことにした。

すぐにチャイムが鳴り、ねみみの周りを囲っていた男子も散り散りに席へと戻る。

じきに森母先生が教室に入ってくるだろうという、微妙な空き時間。

つんつん。

(……無視しないでほしいですのん)

指で友樹の背中をつつきながら、ねみみが背後から小声を投げかけてくる。

現実から目を逸らしている最中の友樹は、どうするべきか迷いの淵に立っていた。

(む)。無視されるとウチ、のどが渴きますねん。水がないとなると、赤い液体を欲してしまいますのん)

(……ちよつと、あなた、なにしてるのよ？ それに、さっきのはなんなのよ？)

ねみみの不穏な発言に、友樹は慌てて振り向くと、とりあえず注目を受けないように小声でねみみに話しかける。

その様子を見て、ねみみは満足そうに笑みをこぼした。

(あは、ウチ、このクラスの生徒になってみましたのん。精霊であるウチの力を持つてすれば、これくらい朝飯前ですねん)

誇らしげ言つてのけるねみみ。

（それはべつにいいんだけど……。ねみ様ってなによ？ お姫様
気取り？ 水まで持ってこさせてさ）

皮肉を含んだ友樹の言葉に、ねみはちよつとムツとした表情を
浮かべる。

（いいじゃないですか。お姫様は女の子の憧れですのん。それに、
ウチにお水は必須なんですね。ウチは樹ですから。この教室から
出たりもできない、不憫な身の上なんですのん）

（……そうなんだ）

（そうです。だからこそその、マイグラスですね。今後定期的に、
水を飲ませてほしいですのん）

（わかったわ。でも、だからって、あれはさすがにないよ。ボクが
水を持ってきてあげるから、男子を使ったりしないでね。もつと普
通の中学生っぽく振る舞わないと、伐採されちゃうかもよ？）

（はう、伐採はイヤですねん！ む、わかったですのん）

（よろしい）

友樹はこうして会話をしながらも、無意識に現実から逃避してい
た。

つまり、ねみが「吸血樹」に宿る精霊であるということも、そ
んな彼女がなんの目的でこんなことをしているのかということも、
一切気にしないようにしていた、ということだ。

「こら、仲良さん。前を向いて！ ほら、倉梳さんも。先生が入っ
てきたら、お喋りはやめなさい！ ……それじゃ、ホームルームを
始めます」

いつの間にか教室に入ってきていた森母先生の注意を受けて、現
実に引き戻された友樹は前を向く。

どうやら先生も、ねみみの存在に疑いを抱いてはいないようだ。精霊の力とやらを使って完全にクラスに溶け込んでいるのだろう。

そんな状況ではあったが、友樹はなんとなく安らいだ気持ちになっ
ていた。

教室の中でこうやって誰かと無駄話に花を咲かせるのも、この中学校に入ってから、初めてのことだったからだ。

「明日からお友達になってあげますねん」

確かにねみみは昨日、そう言っていた。

そして今日、本当にその言葉どおりになっている。一緒に泣いたり笑ったりできる友達がいること、それは生きていく上でとても大切な要素となるだろう。

そんな友達が、昨日までの友樹にはいなかったのだ。

得体の知れない相手とはいえ、ねみみに心を開き、すがってしまったのも、当然の成り行きだったのかもしれない。

あるいはそれを、ねみみは狙っていたのか。

ともかくねみみは今、友樹の友達として、教室の片隅にある席に座って授業を受けている。

友樹にとっては、明るく楽しい未来が両手を広げて待っていて
いる、そんなふうにすら感じられた。

こうして友樹は、久しぶりに穏やかな気持ちで授業に臨むのだった。

そんな教室の中。

（——なにか、おかしいわ……）

誰もが違和感なくねみみの存在を受け入れているように思えたが、ただひとり。

彼女だけは、納得がいけないといった表情を浮かべ、首をかしげていた。

休み時間になって、後ろの席のねみみと楽しくお喋りしている友樹の姿を、じっと見つめる彼女。

「冬野、どうしたの？」

「べつに……なんでもないわ」

そう答えながらも、松園寺冬野は怪訝な表情を崩すことはなかった。

「友樹ちゃんは今日も、素敵で天然パーマですのん。くしも通らなそうです。頑固な友樹ちゃんの性格と同じですね」

「もう、ねみみちゃんってば、意地悪。……っていうか、ボクってそんなに、頑固な性格じゃない……と思う……けど……」

「ん、ウチは、結構芯の通った強さを持つてると思いますのん」

「そういう言い方だと、悪い気はしないかな……」

「髪の毛芯が通ってて硬いですのん」

「そっちは、イヤ……」

「あは、友樹ちゃんってやっぱり、からかると楽しいですねん」

「はうう。やっぱり、意地悪だ」

友樹は休み時間のたびに、こんな感じで、ねみみとお喋りに夢中になっていた。

それによって彼女は、数日前の出来事、つまり松園寺冬野たちに呼び出されて泣いたことも、綺麗さっぱり忘れていた。

いや、もしかしたら、ねみみが言っていた精霊の力によって、忘れるように仕向けられたのかもしれない。

そしてそれは、冬野とその取り巻きたちも同様で、あるとき友樹を屋上のドアの前に呼び出し、いじめの一手前とも呼べる行為に及んだことなんて、すっかり記憶から欠落していた。

しかし、ただひとり。冬野本人だけは完全に忘れてしまったわけではなさそうに思えた。

どうやら彼女はずっと怪訝な思いを抱えたままのようだ。

精霊の力とやらも、万能ではないということだろうか。

じっと見つめる冬野の瞳。その視線はいつも、友樹とねみみに向

けられていた。

そんなある日のこと。

「仲良さんと笹雨ささめ、つき合ってるらしいぜ！」

「マジかよ！ ヒューヒュー！」

中天を少し過ぎた強い日差しが、眠気を誘う暖かさで教室内を包み込む昼休みに、男子たちの囁し立てる声が響き渡った。

まだ給食を食べ終えていなかった友樹は、思わずスープを吹き出してしまう。

ねみみの机と自分の机をくつつけて後ろを向き、ねみみと会話しながら給食を食べていた友樹。

あまりに唐突だったため、手で押さえたり下を向いたりもできず、友樹が吹き出したスープはものの見事にねみみの顔面へと命中する。具を口に含んでいない状態だったのが、不幸中の幸いだろうか。

「うっ、友樹ちゃん、きちやないですのん……」

「ごっほっごっほっ、ご……ごめ〜ん」

咳き込みながら謝罪の言葉をかける友樹だったが、今はねみみがスープまみれになったことよりも、男子たちの会話の内容のほうの問題だった。

男子だけではなく、友樹とねみみが発した突然の大声を聞いたクラス全員が、友樹のほうを振り向き、興味津々の視線を注いでいた。

ねみみが友達になってくれて話し相手ができただけといっても、友樹は結局、他のクラスメイトには馴染めていないのだ。

そんなみんなの視線を一身に受けて、友樹は顔から火が出そうなほど真っ赤になっていた。

（ボ……ボクが、男子と、つつつつ、つき合ってる、なんて……、そんなこと……！）

あるはずない。そう友樹が思うのも当たり前だ。

実際につき合っている男子なんてもちろんいないどころか、ここ最近、男子と会話すらしていないのだから。

「へー、そうなんだ。仲良さん、いつの間に。やるわね」

「おとなしそうな顔して、油断ならないわ」

「べ……べつに、ボクは、そんな……」

男子たちの会話が聞こえていたのだろう、女子からも好奇の声をぶつけられて、友樹はしどろもどろになりながら、どうにか反論の言葉を返す。

ただ、女子たちの投げかけてくる言葉には、不思議とトゲトゲしさはなかった。

それは、あらぬ疑いをかけられているもつひとりの当事者、ほとか 蛍風 笹雨ささぐめが、ちよつと変わり者だからなのかもしれない。

見た目はそれなりにカッコいい部類に入ると思うのだが、かなりズレた発言が多くてつかみどころがない上、性格的にもちよつと気が弱かったりと、ぱつとしない印象なのは否めない。

そんな感じだからこそ、女子たちも、あのふたりならべつにいいや、といった考えにしか至らないのだろう。

「笹雨、よかったな！」

「べ……べつに、ぼくは、そんな……」

冷やかす男子に、おとなしい友樹とまったく同じ受け答えを返すあたりからしても、笹雨のぱっとしない雰囲気を感じられる。

実際のところ、どうしてこんなことになっているのかといえ、数日前のちょっとした会話からだった。

笹雨は、友人の杉崎すぎさきたきぎ薪と檜山ひやまゆうすけ優助のふたりともに、他愛ないお喋りをしていた。

性格的に微妙な部分はあるものの、笹雨はごく普通の学校生活を送っていた。多くはないが友達もいる。

そのあたりが、友樹とは違っていた。

ねみみと喋る姿はクラスメイトにも見られているが、他の人とは全然話さない友樹。

その印象が、「暗い」とか、それに近いマイナスのイメージになるのも、当然といえば当然だ。

「仲良さん、いるじゃん？ あいつつてさ、暗いよな」

「そうだな。倉梳さんとか喋らないし」

「でも、胸は大きいんだよな」

「あはは、確かにそうだな」

なんて話題を何気なく口にする、笹雨の友人ふたり。

それを聞いた笹雨は、

「やめなよ、そういうこと言うのは」

と言ったのだ。

ちよっとした正義感みたいなものは、あったのかもしれない。

しかし、笹雨としてはそれよりも、胸が大きいだとか、そういう

た話題が恥ずかしいという思いのほうが強かったのだろう。

まだまだ小学生気分抜けきれていない中学一年のこの時期。
気になる話題ではあるものの、人によっては恥ずかしくて口にす
るのをためらってしまう。

ただそれだけのことだった。

だから、笹雨が友樹のことを気にかけていたとか、そんなことは
まったくなかったのだが。

とはいえ、その笹雨の言葉を聞いた友人たちは、そうは考えなか
った。

そうか、そうだったのか。だったらおれたちが、友人である笹雨
のためにひと肌脱いでやろうじゃないか。

勝手にそんな思考へと流れていったのも、さほど不思議なことでは
なかったのかもしれない。

そんなこんなで、クラス全体から、からかいの言葉を向けられる
ようになった。

気の弱い友樹と笹雨は否定の言葉を返しはするものの、その声は
小さく、面白がって囃し立てるクラスメイトを静めるような効果がある
はずもなかった。

友樹は笹雨と話したことなんて一度もない。

だから好きとか嫌いとか、そんなことを考えるような対象ではな
かった。

そもそも友樹自身まだ、恋とか愛とか、興味が無いわけではない
が、よくわかっていない。

そんな感じなのだから、こつやって囃し立てられても困ってしま
うだけだ。

だが――。

（なんとなく、悪い気はしないな）

ほのぼのとした、温かいけど恥ずかしくて胸がむずがゆいような
気持ちを感じていたのも、また事実だった。

そしてねみみは黙ったまま、真っ赤になっている友樹の様子を、
ただ優しげな瞳で見つめ続けていた。

「遅かったわね」

屋上へと出るドアに寄りかかり、松園寺冬野が腕を組んで友樹を見下ろす。

彼女の横には、間唯、大和田幸緒、坂本美春の三人が控えていた。思いつきりデジャブを感じる、この状況。

友樹は机に入れられた封筒に気づき、中の手紙に書かれていたとおり、この屋上へと続く階段を上ってきた。

数日前とまったく同じ展開に、友樹も少々怖気づいていた。とはいえ、行かなかつたら余計にひどいことをされてしまうかもしれない。

結局そういう結論に達し、友樹は素直にここまで来たのだった。

「な……なにか用、ですか……？」

やっぱり敬語になつてしまう友樹。

「なにか用ですか、だって！ あはは！」

「ほんと、あんたって暗いよね」

「クラスの雰囲気壊してるのよ、あんたの存在が」

取り巻きの三人が、罵声を投げかける。

「ごめんなさい……」

つつい謝つてしまいがち、友樹は「あれ？」と疑問符を浮か

べていた。

その疑問符は、続けられた美春の言葉によって、さらに大きくなる。

「謝って済むんなら、警察はいらないっての！」

友樹の腕をつかんで引き寄せる美春。

「きゃっ……！」

階段の上へと引つ張られた友樹は、思わず悲鳴を上げていた。待ち構えていたように両手を広げる幸緒が友樹の背後に迫り、背中から羽交い絞めにする。

「大声出しちゃ、ダメだからね」

そう威圧をかけてくる冬野のセリフまで同じ。

（これ、どうなってるの……？ それに、このあとボクは……）

なにをされることになるか想像して、友樹は青ざめる。だが、その想像どおりの展開は訪れなかった。

「ねえ、仲良さん。あなた、笹雨くんと、その……つき合ってるの？」

心なしか頬を染めながら、冬野は友樹にそう尋ねた。

「……ほへ？」

このあいだと同じように、背後の幸緒がセーラー服の中に手を入れてくるのではないかと考え、ぐっと力を込めて身構えていた友樹は、思わず意味のわからない返しをしてしまう。

「だから、その……あなたと蛍風笹雨くんは、クラスの男子が言っていたように、本当におつき合いしてるのかって、訊いてるのよ!」
「え……、え……」。べつに、つき合ったりなんて、してないですよ……? それどころか、お話したことすら、ないし……」
「ほ……本当ね!？」

友樹の言葉に、語気を荒くして確認を促す。

「う……うん」

冬野のあまりの勢いに圧されながらも、友樹はどうにか頷き返した。

（でも、どうして松園寺さんは、そんなことを気にしてるんだろう?）

普通に考えれば、すぐひとつの結論にたどり着きそうなものだが、友樹は激しく鈍感だった。

「い……言つとくけど、笹雨くんはあたしの幼馴染みだから心配してるだけなんだからね! それだけなんだから!」

頬の赤さを増しながら、上ずった声を飛ばす冬野。

そんな彼女を見てもなお、どうしてなのかと首をかしげているあたり、友樹の鈍感さの度合いがいかに凄まじいかを物語っている。

取り巻きの三人は、ちよつと苦笑まじりではあるものの、温かな

視線を冬野に向けながら様子を見守っていた。

「と……とにかく！ あんたを呼び出してこんなことを言ったなんて、誰にも言っちゃだめだからね！ それと、笹雨くんに近づいたりしたら、承知しないから！」

冬野はそう言い捨てると、取り巻きを従えて階段を下りて去ろうとする。

その背中に、友樹は声をかけた。

「あ……あの！ このあいだここに呼び出されたときのこと、ボクは喋ったりしてないです」

だから、今回も喋ったりはしません。そういう意味を込めて、友樹は言ったのだが。

「は？ このあいだって、なによ？」

「ここに呼び出されたって、前にもそんなことしてたの？」

「え〜？ わたしはしてないよ？」

「……あたしも、そんな記憶はないけど」

冬野たち四人は顔を見合わせて、怪訝そうに首を横に振る。
やがて友樹のほうに向き直ると、

「仲良さん、あなた、幻覚でも見てたんじゃないの？」

「なによ、この子。こわ〜い！」

「早く行こう。変なのがうつっちゃうよ」

口々に怯えの声を吐き捨て、彼女たちはその場から逃げるように去っていった。

(……いたい、どうなってるの……?)

ひとり残された友樹は、混乱で頭がいっぱいになっていた。

その後も、友樹は笹雨との関係をからかわれ続けていた。
いや、むしろそれは激しくなり、

「やっぱり、つき合ってるんだろ？ 白状しちゃえよ！」

「ふたりの関係は、どこまで行ってるんだ？」

「そりゃあ、きつと、最後まで……」

「えゝ、マジでっ！？ 笹雨、本当なのかよ！？」

といった感じで、教室を移動する必要のない休み時間のたびに、
噓し立てる声が響く毎日だった。

しかし、どうしてそんな話になるのか、友樹にはまったくわからない。

なにせ、そんな噂が流れ始めたあと、さすがに意識してしまう
ためか視線は何度か交わしているものの、笹雨と実際に言葉を交わ
したりなんて一度もしていないのだから。

必死になって否定すると余計に怪しまれるし、だからといって黙
っていればからかわれる。

どうしたらいいのか、友樹には見当もつかなかった。

「人の噂も七十五日、そのうち消えますねん。それまでの辛抱です
のん」

ねみみは他人事だと思ってか、軽い口調でそう言うだけ。

「……長いよ……」

はあゝつとため息をつく友樹の肩をそつと叩き、黙って慰め続けるねみみだった。

（それにしても――）

友樹は考える。

男子女子を問わずクラス全員から、からかわれる声を受けている感じではあったが、だいたい最初にその話題を大声でわめき始めるのは男子のようだった。

それも、笹雨といつも一緒に行動している杉崎薪と檜山優助のふたりが声を上げて、それに便乗して他のクラスメイトもからかい始める、といった流れであることが多いように思えた。

薪と優助は笹雨の友達なのだから、自分とつき合ってなんていないことは、すぐにわかるんじゃないだろうか。

それなのに、どうしてあんなことを言うのだろう。

いくら考えても、友樹には答えが導き出せなかった。

普通なら少し考えれば、笹雨が友樹に好意を寄せていて、薪と優助が囃し立てることで意識させ友人の恋を応援しようとしている、といったような結論にたどり着きそうなものだが、やはり友樹は鈍感だった。

もともと実際には、笹雨もべつに友樹が好きというわけではなく、友人ふたりが勝手に勘違いしているだけなのだから、その結論にたどり着いたとしても真実には手が届かないのだが。

どちらにしても、笹雨のほうもしつかり否定すればいいものを、友人相手だというのにそれを止めたりもしない。

さすがに気が弱すぎるだろう。

とはいえ、そんな気の弱い笹雨と、おとなしすぎる友樹。

薪と優助のふたりでなくとも、お似合いだと思ってしまうのは、ある意味当然の流れだと言えるのかもしれない。

笹雨本人は今のところ、友樹と会話を交わしたりはしていない。しかし、友人のために友樹からいろいろと訊き出そうとしているのか、薪と優助のふたりは、彼女を質問攻めにするのが多くなっていた。

友樹としては、男子と話すことに恥ずかしさを感じてはいたものの、クラスメイトから話しかけてもらえるということだからか、少し満足気に微笑みながら、質問に答えたり恥ずかしがって答えなかったり。

森母先生も、ホームルームや担当する国語の授業でこの教室に入るたびに、クラスの騒がしい雰囲気^{きふく}に気づいてはいた。

おとなしい友樹と笹雨のふたりを、周りのみんなでからかっている、ということにも気づいていた。

だが先生の目には、思春期の微笑ましい青春のひと幕、という感じにしか映らない。

若いつていいわね、なんてほのぼのと考えるに留まっていた。

「……ねえ、仲良さん。最近、男子にからかわれたりしてるけど、平気？」

ある日の放課後、ひとりの女子生徒が友樹に話しかけてきた。

光林瑞菜^{みつばみずな}。クラスメイトのひとりで、友樹ほどではないものの、

どちらかといえば目立たない女の子だった。

放課後となり誰もいなくなった教室でゆっくりとカバンに教科書やノートをしまっている友樹に、彼女は声をかけてきたのだ。

いつもなら放課後も友樹とお喋りしているねみみが、今日はいつの間にか消えていた。

ねみみが樹の精霊だと、友樹はわかっている。

だから、そういうこともあるのだと理解はしていた。

ただ、もう少し話したいと思っていたため、こうして教室に残っていたのだ。

「光林さん……。うん、大丈夫。あまり気にしてないし、杉崎くんとか檜山くんとか、ねみみちゃん以外ともお話できたりしてるから、そんなに嫌ではないかも……」

瑞菜と話したことのなかった友樹は、少々遠慮がちに話し始めた。だが、最近の出来事で心に余裕ができていたからか、素直な思いをぽろつと口にする。

「ふ〜ん……」

ふと漏らしたその、ふ〜んという瑞菜の声の響きが、友樹にはなんとなく冷たく感じられ、若干浮かれ気味でもあった心を現実に引き戻された。

（光林さん、どうしてボクに話しかけてきたのかな……。？　もしかして……）

友樹は、冬野たちのことをふと考える。

彼女たち同様、この人も自分のことを嫌っていて、調子に乗るなとか、忠告しに来たのだろうか。

そんなマイナス方向の考えが湧き上がってくる。

しかし――。

「そっか、よかった」

にこっ。優しい笑顔を浮かべる瑞菜。

「実はね、わたしも小学校のときはクラスに馴染めなくて、その…、いじめられたりもしてたの。だから仲良さんもこのクラスで、倉梳さん以外とはあまり馴染めてないみたいだったから、あんなにからかわれてつらくないかなって、心配になって……」

その彼女の言葉に、友樹は自分が恥ずかしくなる。

（光林さんは本気で心配してくれてたんだ。それなのに、ボクは疑ってしまった……）

「ありがとう、光林さん……」

そんな瑞菜に、友樹も明るい笑顔を返すのだった。

「仲良さん、あなた最近、調子に乗ってない？」

「ボ……ボクは、べつに……」

「ずっと思ってたけど、そのボクって言い方も、気に入らないのよね」

「あう……。でも、これはずっと前からだし……」

校庭での体育の授業が終わり、更衣室へ戻ろうとひとり歩いていくところを、友樹は腕をつかまれ、体育倉庫の裏へと引っ張り込まれていた。

学校の敷地は、校庭も含めて高い塀に囲まれている。

この場所は、体育倉庫の建物と塀のあいだに挟まれた、人がまったく通らない死角となっていた。人知れず呼び出したりするには、もってこいの場所と言えるだろう。

体育や音楽などのように教室移動を伴う授業の場合、教室から出られないねみみは残って自習することになっている。

その状況に誰も疑問を感じていないのは、やはり精霊の力とやらのおかげなのだろう。

また、たまに声をかけてくれるようになっていた瑞菜は、周りに誰もいないときにしか話しかけてこない。

小学校の頃にいじめを受けていたという彼女、あまり友樹と仲よくして巻き込まれたら嫌だと思っているのかもしれない。

そういったわけで、移動先の教室から戻る際、友樹はいつもひとりだった。

体操着のまま体育倉庫の裏に引っ張り込まれた友樹の前には、四

人の女子生徒が、やはり体操着姿のまま立ち塞がっていた。

それはつまり、彼女たちはクラスメイトと一緒に体育の授業に出ていることを示している。

言うまでもなく、その四人というのは、松園寺冬野と、その取り巻きである、間唯、大和田幸緒、坂本美春の三人だった。

「だいたい、杉崎くんとか檜山くんとかにも近づきすぎじゃない？
そうやってあのふたりから手なずけて、笹雨くんと仲よくなるう
って魂胆なんじゃないの？」

両腕を組んで鋭く睨みつけるような視線を向けながら、冬野が言い放つ。

いつもどおり、取り巻きの三人組も横に並んで控えていた。その表情は、微妙に苦笑まじりに見える。

考えてみれば冬野は、このあいだ呼び出されたときも、友樹が笹雨とつき合っているという噂をすごく気にしている感じだった。

（幼馴染みだって言ってたけど、もしかしたら松園寺さんって……）

いくら鈍感な友樹といえど、ここまで来ればさすがに冬野の想いに気づいてしまう。

「松園寺さんって、蛍風くんのこと、好き、なの……？」

「な！　ば……ばか！　そんなこと、あるわけないじゃない！　誰があんな奴！　ただの幼馴染みだって言ったでしょ！？」

友樹の言葉に、思いつきり真っ赤になって焦り声を上げる冬野。

取り巻きの三人もそんな彼女の様子を、生温かい視線で見守るだけだった。

こんな状況なら優劣が逆転しているのだから、そこに付け込んで反撃したりするものかもしれないが。

友樹はそんな思いに至るような思考回路を持ち合わせていなかった。

「そっか、見かけによらず幼馴染み思いのいい人なんだね、松園寺さんって」

もちろん友樹に悪気なんてないのだが、そんなことを言ってしまう。

当然ながら冬野は、それに反応して怒りの声を上げる。

「な……！ あんた、あたしをバカにしてるでしょ！？ もう怒った！ みんな、やつちやいな！」

あんたは手を下さないんかい、とか、ツッコミどころは満載な気がするものの、取り巻きたちは素直に冬野に従う。

「きゃっ！」

美春が友樹の両腕を乱暴につかみ、塀に押しつける。

「今日こそは、しっかりと自分の立場つてのを思い知らせてあげるからね」

ふふふと悪役じみた笑みを浮かべる冬野だったが。

キンコンカーンコン……。

チャイムの音が鳴り響いた。

「わっ、冬野、予鈴だよ！ 早く着替えて戻らないと！」

「そ……そうね、急がないと！ サボりだと思われたら、内申にも響くわっ！ ……ふっ、命拾いしたわね、仲良さん。言っとくけど、誰かに話したら……」

「ほら冬野！ ごたく並べてないで急ぐよ！」

「わ、わかってるわよ！」

慌ただしく友樹の前から走り去っていく冬野たち。

（内申とか、気にしてるんだ、冬野さん……。意外と真面目なのね。やっぱり見かけによらない人だな）

思わず失礼な感想を抱く友樹だった。

「つて、ボクも急がないと！」

友樹も大急ぎで更衣室へと走り出す。

同じ更衣室を使うのだから、冬野たちと再び顔を合わせる事になったのだが、向こうも急いでいるからか今度はなにも言われなかった。

大急ぎで着替えて戻ったというのに、次の授業は先生がお休みと
のことで自習だった。

「ねえ……、えっと、大丈夫だった？」

ふと瑞菜が友樹に話しかけてくる。

どうやら、冬野たちに体育倉庫の裏に引きずり込まれたのを見ていたらしい。

しかし友樹は、だったら助けなくてもよさそうなものだけど、なんて考えには至らない。心配してくれていたんだと、素直に喜んですらいた。

「うん、すぐ予鈴が鳴ったし、大丈夫だよ」

「そっか、よかった」。松園寺さんって、お嬢様だかなんだか知らないけど、ちよつとその、嫌な感じの人だよな」

さすがに声を潜めて、瑞菜はそうささやいた。

「ん、でも、そんなに悪い人じゃないのかも」

「そうなの……？ ま、いいわ。元気そうだし、安心した。じゃ、席に戻るね」

「うん」

手を軽く振って瑞菜は席に戻っていった。

席に戻った彼女が友達と話す声が微かに聞こえてくる。

「瑞菜、仲良さんとなにを話してたの？」

「え？ ううん、落し物を拾ったから返してただけよ」

（……やっぱり、ボクと話してることを、周りの人には知られたくないんだ……）

少し悲しく思う友樹。だが、彼女の気持ちもわからなくはない。誰だって、いじめられたくはないのだ。

「ふん」

と、そんな友樹の背後から、不意に声がかかる。

友樹が振り返ると、ねみみが机に頬杖をつきながら見つめていた。友樹と瑞菜の様子を黙ったまま見ていた彼女の視線には、なんとなく恨みがましい念がこもっているようにも思えた。

「ど……どうしたの？　ねみみちゃん」

「ん、楽しそうに話してたな、って思ってたんですけどん」

そうつぶやくねみみの顔は、寂しそうに曇っていた。

「……もう、ウチは必要ないのかな？」

「そ……そんなことないよ……！」

どうしてそんなことを言うのだろう、そう思いながらも、友樹は焦って否定の言葉を添える。

それを聞いたねみみは少し表情を緩めたものの、彼女の曇った気持ちは、完全に晴れてはいないようだった。

ねみみは最初、取り巻きを従えるお姫様のような扱いを受けていた。

もちろんそれは、彼女の精霊の力を使つてのことだったのだが。今のクラスメイトは誰も、そのことを覚えてなどいない。

では、今のねみみはどんな扱いになっているのかというところ――。

「やゝ、ねみみちゃんはいつも可愛いね。なにか嫌なことがあつても、絶対にお兄ちゃんが守つてあげるからね！」

「ありがとうですねん。怖いお化けが現れたら、守ってくださいですのん」

どうやら今度は、妹属性キャラになっているようだった。

とはいえ、いつも周りに男子が集まっているという感じではないので、友樹も文句を言つたりはしなかった。

男子たちは、いつでもちやほやするという感じではなく、たまに声をかけてくる程度だった。

ねみみとしても、男子たちをばびこらせて友樹の席のすぐ後ろに人だかりができると、結果として友樹に文句を言われることになるのがわかつているのだろう。

お姫様扱いのときには、女子からは少し恨みのこもつたような視線を向けられたりもしていたのだが、今はそんなこともない。

それどころか、女子も一緒になって妹扱いとして可愛がっているようだ。

クラスメイトなのに妹というのもどうかとは思つが、妹のように可愛い雰囲気を持った女の子、という位置づけになっているのだろう。

「……ねみちゃん、いいな……」

友樹はそんなねみを、うらやましく思っていた。
妹扱いでみんなにちやほやされることが、ではない。

そんなふうに、人が感じる自分の印象を意のままに操れる彼女の能力を、うらやましく思っていたのだ。

とはいえ、そう思ったところでどうなるものでもない。自分は精霊にはなれないのだから。

自分は自分らしく、生きていくしかないんだ。

そう決意を固める友樹。

そんな彼女に穏やかな視線を向けて、ねみは優しく友樹の頭を撫でるのだった。

昼休み、友樹はいつものように机をくつつけて、ねみとともに給食を食べていた。

もちろんねみは給食には手をつけず、マイグラスに注がれた水を美味しそうに飲むだけなのだが。

今日は汗ばむ陽気だからか、友樹の食はなかなか進まない。
それに反して、ねみの水を飲むペースは早かった。

早々にグラスを空にするねみ。

「お代わりがほしいですのん。友樹ちゃん、お願いですねん」
「えゝ？ ボクまだ食べ始めたばかりなのに……」

さすがに洩る友樹に、ねみみは駄々をこねる。

「むゝ、でもウチ、早くお水が飲みたいですよんゝ」

そんなねみみの目に映ったのは、ひとりの男子生徒が持っているビンだった。

「あつ、檜山くん！ それ、ちょうだいなのですよん！」

ねみみは素早く席を立ち、薪や笹雨に見せびらかしていたビンを優助から奪い取る。

そしてそのビンのふたをおもむろに外すと、中の液体をマイグラスに注ぎ込む。すぐにグラスは透明な液体でいっぱいになった。

「わっ、倉梳さん、それは……！」

慌てて止める優助の声が空しく響く中、あつという間にねみみはその液体を飲み干してしまった。

友樹は、気づく。

ビンに貼られたラベルには、「大吟醸・檜山桜」と書かれてあるということに。

一瞬にして、ねみみの顔が真っ赤に染まる。

「きゃはははは！ ウチ、なんだかとっても、いい気分ですよんゝ」

「」

思いつきり酔っ払ってしまったようだ。

さすがに慌てる周りの面々。

「あうあう、ねみみちゃん、大丈夫？　っていつか檜山くん、なんでお酒なんて持ってきてるのよ？」

「いや、うちで作ったお酒を笹雨たちにも宣伝して、親に勧めて買いに来てもらおうかと思って……。先生にも勧めようと思ってたしさ……」

優助の家は、檜山酒造という酒屋なのだそう。それにしたって、わざわざ本物を持つてくることもないだろうに。

ともかく今はそんなことを言っている場合ではない。

ねみみをどうかしようと思っただけのほうに向き直り、友樹は声をかけ続ける。

「ねみみちゃん、落ち着いて！　あつ、そうだ。檜山くん、グラスに水を！」

立ち上がってはしゃいだ声を飛ばすねみみの正面に回り、友樹はすかさず、横にいた優助に指示を出す。

そのとき顔を横に向けたのが、油断となったと言えるのだろう。

「うふふふ、友樹ちゃん、かゝわい」

ガバツ。

思いつきり強く抱きついてきたねみみに、友樹は慌てた声を上げる。

「ちょ……、ねみみちゃん！　痛いよっ！　それにお酒臭いってば……」

「むっ、友樹ちゃん、ひどいですねん！　ウチが臭いだなんて！」

ねみみはどうやら、酔っ払うと執拗に絡んでくるようだ。
手がつけられない状態のねみみに、友樹は抱きつかれながら、どうしたものか思案に苦しんでいた。
ともかく、涙目でいじけているねみみを、どうにかしてなだめないと。友樹はそう考える。

「ねみみちゃんが臭いだなんて言っ
てないよ。お酒のほうだから」
「スキありっ！」

どぶちゅっ！
いきなりねみみが、友樹に唇を重ねた。

「んんんんん~~~~~!?」

あまりのことに、声にもならない友樹。いや、唇が塞がれているのだから、声を出せるわけもないのだが。
それにしても、絡んでくるだけでなく、キス魔になってしまっている。
は。

（ファーストキスがお酒の味なんて、いや~~~~！で……でも、ねみみちゃんは女の子だし、そもそも精霊なんだから、ノーカウントってことで……！）

お酒の臭いのせいもあったのか、パニック状態でそんなことを考えながらも、友樹はねみみから唇を離すことすら忘れていた。

「ぶふあっ！」

長いキスを堪能したのか、唇を離れたねみみは、

「あはははははは！」

と笑い声を響かせたかと思うと、自分の机に突っ伏して、ぐーすかぴーと寝息を立て始めた。

「仲良さん、水、持ってきたよ！……って、あれ？」

グラスに水を注いで持ってきた優助の声は、呆然と立ち尽くしている友樹の耳には届かない。

「水……どうしよう……」

優助もグラスを持ったまま、呆然と立ち尽くすしか、成すすべはなかった。

「さっきは、ごめん……」

五時間目の休み時間、優助は友樹のもとに赴き、謝った。

「ん……もう、いいよ。わざとじゃないし、過ぎたことだから」

友樹は答えながら、視線をねみみに向ける。

あのあと、優助が持ってきた水を飲んでどうにか酔いも少しは醒めたものの、ねみみは授業中も眠気と必死に戦っているようだった。そして授業が終わって休み時間になった途端、また眠り始めてしまったのだ。

謝りに来た優助の隣には、薪と笹雨も立っていた。

「優助のバカがお酒なんて持つてくるから悪いんだよ。いつもお前は考えなしに行動するんだから」

「う……うるさいな。でも、反省はしてます……」

そんな薪と優助のやり取りに、微かな笑みを浮かべる笹雨。そしてその笑顔を、ずっと友樹のほうに向ける。

「仲良さん、さっきは散々だったね」

急に話しかけられて、友樹はびっくりしていた。

薪や優助とは話したことがあったものの、笹雨と話したことはまだ一度もなかったからだ。

それなりに話せる人もできていた友樹ではあったが、基本的に人見知りの性格というのは変わっていないのだ。

「そ……そうだね……。なんか、変なところ見られちゃったし、ボク、ちよつと恥ずかしい……。」

少々どもりながらも、どうにか声を紡ぐ。自然と顔は赤くなっていた。

「あはは、でも、仲のいい女の子同士って、楽しそうでいいよね」

「そ、そうかな……ありがとう……」

恥ずかしさで視線を逸らしていた友樹は、話しているのに失礼かも、と不意に考え、笹雨の瞳を見つめ返しながらお礼を述べた。

いまいち会話として成立しているのか怪しい受け答えではあったものの、こうして友樹と笹雨は初めての会話を交わしたのだった。

すぐにチャイムが鳴り席に戻っていく笹雨たちの背中を、友樹はぼーっと眺める。

そんな様子を、微妙な思いで見つめるふたりの視線に、友樹は気づくことはなかった。

ひとりは冬野、もうひとりは瑞菜だった。

ふたりとも、恨みのこもったような、それでいて少し寂しさも含んだような視線を向けていた。

そして。

ぐか~~~~~!

友樹のすぐ後ろでは、ねみみが豪快ないびきを響かせていた。

「遅かったわね」

屋上へと出るドアに寄りかかり、腕を組んで友樹を見下ろす冬野。その前には、唯、幸緒、美春の三人が控えている。

またですか。

友樹ですらそう思ってしまう状況。

放課後、友樹はまた冬野たちに呼び出され、屋上前のこの場所に來ていた。

「仲良さん、あたしの言ったこと覚えてる？ 笹雨くんに近づくな
って、言ったはずよ」

怒りの表情を隠しもせず、冬野は鋭い視線で友樹を睨みつける。

「あ……」

友樹は、すっかり忘れていた。

確かにさっき、少しだけだったとはいえ、笹雨と会話を交わした。
しかあしあれば、笹雨のほうから話しかけてきたからだ。

話しかけられて無視するわけにもいかないし、不可抗力だと思
うのだが。

冬野にすれば、そんな事情なんて関係ないのだろう。

ただ笹雨と話していたのが許せない。そういうことなのだ。

「……ごめんなさいっ！ でも、蛭風くんのほうから話しかけら

れただけだし、べつにボクは……」

「でも！ 赤くなって見つめ合ってたじゃない！」

うわ、よく見てる……。友樹は思わず他人事のような感想を抱いてしまう。

「そ……そういうのじゃないです！ ……多分……」

つつい余計なひと言をつけ加えてしまった友樹に、冬野は怒りのマグマを頭のとっぺんから噴出させた。

「この……！ 今日という今日は、許さないんだから！ みんな、やっちゃんなさい！」

やっぱりあんたは手を下さないんかい！

そんなツッコミは心の中にしまい込む、友達思いの取り巻き三人組。

美春が両腕をつかみ、抵抗する友樹を押さえつける。

そして幸緒が背後に回り、友樹のセーラー服の中に手を突っ込むと、ブラジャーのホックに指をかける。

すかさず唯がケータイを構えてその様子を写真に撮ろうとする。

思いつきりデジャブを感じるこの状況に、友樹は最初のとときと比べたら少しは余裕のある拒否の叫び声を上げる。

「や……やめてってばっ！」

「うるさいっての！ 静かにしなさい！」

バシッ！

今まで、実際に傷をつけてしまうと大変だと考えていたのか手を

上げたことのなかった冬野が、平手打ちとはいえ、友樹の頬を思いっきり叩いた。

「痛……っ！」

痛さと驚きで、涙がにじむ。

友樹は冬野たちに、何度もこうして呼び出されたり物陰に引っ張り込まれたりしていたものの、危害を加えたりまではしなないと思って、少し安心している部分があったのだ。

それで心に余裕を生ませていたのだが、その防波堤も今、あっさりと崩れてしまった。

追い討ちをかけるように、

ピロリロリン。カシャリ。

ケータイのカメラのシャッター音が響く。

「……………っ！」

今の自分は、背後から組みつく幸緒によってセーラー服がたくし上げられ、ホックこそ外されなかったとはいえ、ブラジャーがあらわになっている状態。

それを、写真に撮られたのだ。

「きゃははっ！ 綺麗に撮れてるよ！ ホラ！」

唯はご丁寧に、撮った写真を友樹本人に見せつける。

ケータイの液晶画面には、真っ赤になって泣き叫んでいる友樹がセーラー服の前をはだけ、ブラジャーもはつきりと見えてしまっている画像が、鮮明に写し出されていた。

「や……、ダメ！ それ、消してよ！」

涙をぼろぼろと溢れさせながら懇願する友樹を、いやらしい笑いを浮かべながら見下ろす四人。

「きやはは！ ダメだよ、消さないからね！ これを男子とか先生とかにばら撒かれたくなかったら、冬野には逆らわないことね！」

どうやらすぐにメールで送ったりはしないようだとわかったものの、友樹は半狂乱になっていることもあり、そんなことで安心できるわけはなかった。

実際のところ、唯は普段から冬野の取り巻きをやっていて、周囲にはいつも女子ばかりというグループの中にいる身だ。

彼女のケータイには、男子のメールアドレスなんてほとんど登録されていない。ましてや先生のアドレスなんて、知るはずもなかった。

だから、写真がメールでばら撒かれる心配なんてないのだが、友樹はそんなことまで頭が回らない。

もっとも写真としてケータイにデータがあれば、プリンタで印刷してばら撒くことも可能なことから、心配のいらぬ状態とは言えないのも確かなのだが。

ともかく冬野たちとしては、友樹が自分たちの言いなりになるように念を押すというのが、今回の目的だったようだ。

泣きじゃくって頭垂れている友樹を見て、満足そうに笑顔を浮かべていた。

「それじゃ、仲良さん。ま・た・ね」

ねっとりとした雰囲気の声を残して、冬野たち三人は階段を下りていった。

涙を流して教室へと戻った友樹を待つ者は、誰ひとりとしていない。

さっきのお酒が残っていたからなのか、他に用事でもあったのか、教室にはねみみの姿もなかった。

教室からは出られないはずなのだから姿を消しているだけなのだろうが、精霊のことなど友樹にはよくわからない。

最近は放課後の他に誰もいない時間になると、瑞菜が話しかけてくれたりもしていたのだが、今日は彼女の姿もないようだ。

（やっぱり誰も、ボクのことなんて本気で心配してくれたりしないんだ……）

思わずマイナス思考に囚われ始める友樹。

実際には吹奏楽部の練習が忙しいからいないだけで、瑞菜は友樹のことを気にかけてはいたのだが。

ここ最近、そばに誰かのいる状況が多くなっていたためか、友樹にはひとりが余計に寂しく感じられた。

（……ねみみちゃん、少し待ったら出てきてくれるかな……？）

すがりつく存在が恋しくて、友樹は自分の席に座り、まだ自然と涙が流れ落ちる中、しばらくのあいだ黙って待ち続けた。

しかし、ねみみは結局現れなかった。
傾いた日差しが、友樹の濡れた頬を赤く染める。

(……帰ろう……)

頬を拭い、そっとカバンをつかむと、友樹はひとり寂しく、夕陽が差し込む廊下をとぼとぼ歩いて帰るのだった。

友樹は相変わらず、クラスメイトから笹雨との関係をからかわれ続けていた。

つき合っていると言われ、冷やかされたりしていると、もともとは全然気にしていなかったとしても、さすがに少しは意識するようになってしまうもので。

積極的にとまではないが、友樹と笹雨は、たまに声をかけ合ったり視線を交わして苦笑し合ったり、という感じにはなっていた。

それを見られるとまた、主に薪と優助のふたりによって囃し立てられ、余計にからかわれる。そして仲よく頬を染めるふたり。

クラスメイトからの冷やかしやからかいの言葉が途切れないのも、当たり前といえは当たり前だろう。

「笹雨、恋人同士なんだから、もっとくっつけよ！」

「ちょ……ちょっと、そんなんじゃないって……！」

優助が笹雨の背中を押して、ちょうど椅子から立ち上がった友樹に密着させようとする。

「薪、そっち頼む！」

「おっけ」

「きゃっ……！ ちょっと……やめてよ」

優助に指示された薪が背後から友樹の両肩をつかみ、彼女が動かないように押さえつけた。

ふたりの男子の成すがまま、背中を押された笹雨と押さえつけられた友樹は、ぴったりと抱き合うように密着する。

笹雨も友樹も、嫌がっているような声を発しながらも、暴れて無理矢理逃れようとまではしない。

笹雨のほうとしては、べつに嫌なわけでもないから、というもあるのかもしれない。

一方の友樹は、男子につかまれているのだから逃れられないと、半ば諦めているようにも見受けられる。

どちらにしても、薪と優助を殴るなり蹴るなりして怯ませ、本気で抜け出そうと思えば抜け出せるはずだ。

だがそうしないのは、さすがにクラスメイトに暴力を振るっては悪いという思いもあるだろうが、ここ最近いつもこんな感じだったため、彼女も慣れてしまっているからなのだろう。

「お前ら、やめろつてば」

「そうよ、やめてよ」

ふたりとも困ったような表情を浮かべながらも、本気で相手を押しのけたりはしない。

「そんなに嫌なのか？　笹雨、そんなに仲良さんのこと、嫌いかな？」

ニヤニヤといやらしい笑いを浮かべながらの優助の質問攻撃に、しどろもどろになってはいたが、笹雨はどうにか答えを返す。

「いや、べつに嫌いってわけじゃ……」

「ほうほう、そうかそうか。それじゃ、仲良さんはどうなんだ？」

笹雨の答えを聞かぬやいなや、すぐさま質問の矛先を友樹に変えてくる優助。

「え……？ ボクも、べつに嫌いじゃないけど……」
「だったら、いいじゃんか！」

その友樹の答えを聞き、優助はよりいっその笑顔をきらめかせながら、さらにぎゅうぎゅうとふたりを密着させる。

友樹と笹雨は、赤くなって恥ずかしがるばかり。

とはいえ、本気で力を入れているようには見えないものの、友樹のほうは両手で笹雨の体を押し返すような素振りを見せているのだから、密着度としては、さほどでもない。

それならばむしろ、友樹を後ろから押さえている薪のほうが、彼女と密着している度合いが高いと言えるのかもしれない。

現に、優助が笹雨をあまりに強く押すものだから、友樹もその反動で押され、彼女のショートカットの髪が薪の鼻をくすぐっていた。それにより、ほのかな髪の香りを感じた薪は、思わず頬を赤らめている、といった状態だったりもするのだが。

ともかく、そんな感じで男子たちにかかわれ、ベタベタとくっつかれている友樹。

自分の前の席でこんなことが繰り返されていたら、ねみみが口を挟んできそうなものだが、いつの間にか彼女は姿を消していた。

休み時間が終わるまで、このままなのかな。

友樹がそう諦めかけていた、そのとき。

唐突に男子たちを怒鳴りつける声が響いた。

「……ちよつと、やめなさいよ！」

それは光林瑞菜だった。

普段はおとなしい雰囲気の彼女からは想像もつかない大きな声に、怒声を向けられた優助たちだけでなく、友樹までもが驚きの表情を浮かべる。

そんな表情なんて気にすることもなく、瑞菜は友樹の肩を押さえつけていた薪の両手をつかむと、バツと引きはがした。

「もう、女の子ひとりを寄ってたかって、恥ずかしいと思わないの？」

じつと薪の目を見据えて言う瑞菜。

「う……うん、そうだよね……。ごめん」

彼女の勢いに、薪は思わず素直な謝罪の声を返す。そのあいだもずっと、瑞菜は友樹の肩から引きはがした薪の両手を、ぎゅっと握り続けていた。

瑞菜の登場で水を差された男子三人は、そそくさとその場を去る。その様子を険しい目線で眺めていた瑞菜だったが、三人がそれぞれの席に着くと、友樹に顔を向けて話しかけてきた。

「仲良さん、大丈夫だった？ ……嫌よね、男子って。ほんと、子供なんだから」

「ありがとう、光林さん……。確かに、ちょっと困っちゃうよね。でもボク、びつくりしたよ。光林さんが助けてくれるなんて、思ってたなかったし……」

友樹の少し呆然とした表情を正面から見つめ、瑞菜は意を決したように笑顔を返す。

「だって……友達でしょ？」

その言葉で、ぱーっと明るい笑顔になった友樹は、とても温かな気持ちに包まれていた。

他のクラスメイトも周りにいる状態で、瑞菜がちゃんとした友達として友樹に話しかけたのは、これが初めてのことだった。

だが、嬉しさでいっぱいになっていた友樹には、そのことに気づけるはずもなかった。

そして――。

男子たちにくっつかれているあいだずっと、友樹のほうを、いや、男子――とくに杉崎薪のほうを、恨みがましいような、うらやましいような、そんな複雑な表情を浮かべながら見つめていた瑞菜の視線にも、もちろん気づいているはずはなかった。

からかわれている感じではあるものの、頻繁に友樹のもとに近寄ってくる男子三人。

いつしか、ねみみまでもがそれに混じって、一緒に友樹をからかったりするようになっていた。

そうやって騒いでいると、瑞菜も積極的にその輪の中に入ってきたりして、友樹の周りはいつも明るい雰囲気にも包まれるようになった。

笹雨や優助たちだけでなく、他の生徒も近くに集まってくることもあった。

それはだいたいねみみに話しかけるためなのだが、ともかく友樹とねみみの周囲にはいつも、誰かしら人が取り巻いている。

だから以前のように、寂しくひとりで本を読んでいるなんてことも、今の友樹にはなくなっていた。

しかし、そんな様子を見て煙たく思っているクラスメイトがいるのも、また事実だ。

今もこうして友樹に冷たい視線を向けている彼女。

それは、松園寺冬野だった。

いつもどおり、取り巻きの三人が彼女のそばに控えている。

冬野がどう動くか、それをじっと待っているのだ。

松園寺家が大金持ちだから、目にかけてもらおう。彼女たちにそういう思いがあったのは確かだろう。

しかしそれはおそらく最初だけだ。

わがままなお嬢様という、絶滅危惧種のような珍しい生き物であ

る冬野の言動を間近で見て、それを楽しんでいる。
今ではそんなふうにしかなえない。

もちろん、当の本人である冬野は、そんなことに気づいてなどいないだろうが。

すっ……。

長い髪をしなやかに揺らしながら、席を立つ冬野。

（ついに動き出したわね。今日はどうなるかな、楽しみだわ）

そんな含み笑いをたたえながら、三人の取り巻きも冬野に続く。
冬野はつかつかと足音を立てながら、まっすぐ友樹のそばへと近づいていった。

「ちょっとみなさん、通してもらえませんか？ 仲良さんに、お話がありますの」

腕を組んで、上から目線の高圧的なセリフをためらうことなく言い放つ。

「……なんだよ、いったい」

文句を言いながらも、男子生徒は道を空け、彼女を通した。

冬野は怯える友樹を目の前に見据えると、斜めに構えて立つ。

思わず周りのクラスメイトたちも口を閉じ、成り行きを見守っていた。

そんな注目されている状況もなんのその、冬野は高圧的な態度を緩めないまま、言葉を吐き出す。

「仲良さん、あなた、何様のつもりなんですか？ それに、こんなに人が集まっては、騒がしすぎます。あなたのせいで、こんなふうになっているのですから、どうにかすべきじゃないかしら？」

さすがに他の生徒たちもいるから、屋上のドア前に呼び出したときのような言い方まではしなかったものの、冬野は聞いている人の神経を逆撫でするような口調でまくし立てた。

張り詰めた空気が、辺りを包む。

言われた当人である友樹は、どうしていいかわからず、おろおろするばかり。

ふとその背後で、ねみみが微かな笑みを浮かべる。

刹那。

「……そっちこそ、何様のつもりだよ」

ひとりの男子生徒が、ぽつりとつぶやきを漏らした。

と、それに便乗したのか、他のクラスメイトも次々と思い思いの言葉を冬野にぶつけ始める。

「だいたい松園寺さんって、可愛げがないよな」

「お嬢様だからって、なんでもわがままが通るわけじゃないってことを、思い知るべきだ」

「そうよね、ちょっと威張ってる感じで、わたしも苦手だし」

女子にまで思ってもいなかった反撃を受け、冬野もさすがにたじろぐ。

「な……ちょっと、あなたたち、文句あるっていうの……!？」

それでも懸命に虚勢を張り、言葉を返すものの、その顔には焦りの色がありありと浮かんでいた。

そこへ、とどめとばかりに追い討ちをかける声が響く。

「嫌ですわねん。あの人、野蛮ですのん。ウチ、怖かったです。」

……友樹ちゃんもそう思うよね？」

「え……う、うん……」

いきなりねみみから質問を振られて戸惑いながらも、友樹は思わずそう答えていた。

怒りで真っ赤になって肩を震わせる冬野だったが、それ以上反撃を続けられるほどの根性までは、持ち合わせていなかったようだ。

「ふんっ！」

素早くその身を反転させると、なにも言わずに立ち去っていった。彼女のあとに続く取り巻き——唯、幸緒、美春の三人は、軽く肩をすくめて苦笑を浮かべながらも、冬野の背中を追いかける。

残された友樹とねみみの周囲は、沈黙に包まれていた。

だがすぐに、まるでなにごとでもなかったかのように、冬野が口を挟んでくる前とまったく変わらない、ほがらかな笑い声の響く会話が再会されるのだった。

「あの子、やっぱム力つく！」

キーンツと怒りの声を抑えられない様子の冬野。

彼女は今、いつもの隠れ場所、屋上へと出るドアの前で、取り巻きたち三人とともに座り込んでいた。

あの子、とは言うまでもなく、友樹のことだ。

さっきは友樹に文句を言いに行つて、逆に他のクラスメイトからの反撃を食らつた。

それもみんな、友樹のせいだ。

責任転嫁もはなはだしいが、そういう結論に至つてしまうのも、冬野の性格を考慮すれば当然と言えるだろう。

「しかもなんか、男子にモテモテって感じじゃない！　いつも周りに、何人も男子をはびこらせて！」

「……周りにいるのって、男子だけじゃないけど……」

控えめにツツコミを入れる美春だったが、その声は怒り心頭の冬野によつてかき消されてしまう。

「違うわよね、あんな冴えない子に、みんなが寄っていくはずないわ！　あの子が、笹雨くんだけじゃなくて、他の男子まで手にかけてるんだ！」

ひとりで叫び声を上げる冬野の様子に、唯も、幸緒も、美春も、ただ苦笑いを浮かべるだけだった。

実際のところ、薪と優助はともかく、それ以外の男子について言えば、いつも友樹のそばにいるねみみのほうに集まっている感じなのだが。

とはいえ、ねみみと仲よしの友樹がそばにいたら、一緒に話に混じるのも自然な流れ。

友樹もいつの間にか話の輪の中に取り込まれている、ということが多かったのも事実だ。

この状況でねみみを恨む方向に思考が進んでいかないのは、やはり彼女の精霊としての力が作用しているからに違いない。

「それにしても冬野、どうしてそこまで仲良さんのことを目の仇にするわけ？ そりゃあ、蛍風くんがあの子と仲よくしてるのが気に入らないのはわかるけどさ」

黙って言うとおりにしているのにも飽きてきたのか、唯が冬野にそう質問した。

「な……っ！？ ベ……べつにあたしは、笹雨くんのことなんて、どうでもいいんだってば！ ……でも、他になにかあるわけじゃないわよ。なんとなく、ムカつくの。それだけよ！」

「ふーん？ ま、いいけど。でもさ、見る限りあのふたり、とくにつき合ったりしてるわけじゃなさそうだよな」

「そうそう。杉崎くんと檜山くんが無理矢理くつつけようとしてる感じだよな。まあ、仲良さんも蛍風くんも、嫌がったりはしてなさそうだったけど」

冷静さを保てない冬野はともかく、一步下がった目線で成り行きを眺めているからなのか、取り巻きの三人組は状況をよく把握しているようだった。

「な……！　なんで笹雨くん、嫌がらないのよ！　もう、ほんとムカつく！」

「まあまあ、抑えて抑えて」

再び怒りで顔が赤味を帯び始めていた冬野を、幸緒がとりあえずといった様子でなだめる。

「うーん、それじゃ冬野も蛭風くんとベタベタくっつければ、あの子と同じってことだから、それで満足なのかな？　そうだったら、仲良さんに突っかかりたりしなくなる？」

ちよつと面白がっているような笑みを浮かべながら、唯は冬野にそう尋ねた。

「な……なによ、それ！？　そういうことじゃ、ないっての！」
「ふーん、じゃあ、どういうことなの？」

ニヤニヤニヤ。

笑い顔を張りつけたままの三人が、興味津々に冬野を攻め立て始めた。

「ちよ……あんたたち、あたしをバカにしてるの！？」

三人が自分を笑い者に行っていると感じ、怒りの矛先を取り巻きたちに向けた冬野の叫び声が、誰も通らない寂しいこの場所にこだまする。

「違うよー。心配してるんだってば」
「そうそう」

「わたしたち、友達でしょ？」

冬野はいきなりの友達発言に、顔を真っ赤にする。

「な……！　だってあんたたち、あたしの家がお金持ちだからって、こうしていつも一緒にいてくれるだけじゃ……」

自分がとても失礼なことを言っているというのも、まったく自覚はないのだろう。

そんな冬野の性格をよく知っているからこそなのか、取り巻き三人組は彼女に穏やかな笑みを返す。

「冬野はわたしたちを、そういうふうにしか思ってたんだ。ショックだな」

「ほんと。わたしたちはずっと、友達だと思ってついてきてるのに」「わたしたちって、冬野にとっては手下とか下僕とか、そんな感じなの？」

責めるような言葉を返しながらも、彼女たちの笑顔には優しさが溢れていた。

「あ、あたしは……っ！　そ、その……、三人ともかけがえのない、大切な、と……友達だと、思ってる、わよ……」

後半は恥ずかしさで聞こえるか聞こえないかというほどの小さな声になってはいたが、はつきりとそう答える冬野。

「きゃははっ！　冬野、マジで答えたよっ！」

「うん、恥ずかしい！」

「え？　ちょ……！　あんたたち、あたしをからかったのね!？」

突然三人に笑われて、冬野は真っ赤になって怒り出す。

「うふふ！ 冬野ってば楽しいわ！ でも……」

そんな冬野に優しい笑顔を向けながら、幸緒は彼女をじっと見据えて言葉を続けた。

「かけがえのない大切な友達だったのは、わたしたちも同じ思いよ」
「……………」

冬野は恥ずかしくて、そして嬉しくて、まともに声が出せなかった。

「きやははっ！ やっぱ冬野、楽しい」

唯はそれを見て、はしゃいだ黄色い声を上げる。そんな彼女を見ていると、やっぱりからかわれているようにしか思えないが。

とはいえ、三人の温かい想いは伝わったのだろう。冬野もそれ以上、反発心むき出しの天邪鬼な言葉を返したりはしなかった。

「……で、どうする？ もう仲良さんにちょっかい出したりはしないの？」

そう美春に言われ、再び険しい顔になった冬野は、思考を巡らせ始める。

「……ダメよ。たくさんの男子を手籠めにするなんて、おとなしい顔してやるのが汚いわ。やっぱり許せない！ しっかりと言い聞かせてやらなきゃ、気が済まないわよ！」

ぐつとこぶしを握り、そう言いきる彼女は、いつものお嬢様モード全開に逆戻りだった。

肩をすくめて顔を見合わせる取り巻き三人組ではあったものの、

『了解』

声を合わせて、そう答えていた。

休み時間のたびに、友樹をからかいに来る優助たちや、ねみみとお喋りしに来るクラスメイトで、ふたりの席の周辺は騒がしいことが多かった。

だが、たまにまったく誰も来ない静かなときもある。クラスメイトにもそれぞれ用事などはあるのだから、そんなものだろう。

優助たちにしても、いつでも女子にはかりちよっかいを出していると、男子から白い目で見られるという理由もあった。

もつとも、ねみみに群がる生徒たちは、彼女の精霊の力とやらで可愛い妹のように扱っているだけなのだから、たまには静かに過ごしたいと思ったねみみ本人が、誰も近づかないように調整しているのかもしれないが。

「ねえ、友樹ちゃん。ウチ、お水飲みたいですよん」

不意にねみみが、友樹にそうお願いしてきた。

「え？ うん、わかった」

ねみみからグラスを受け取ると、友樹は素直に水飲み場へと向かう。

グラスに水を注ぎながら、友樹は少々心配になっていた。ねみみの声に、いつものような元気がまったく感じられなかったからだ。

「はい、ねみみちゃん。持ってきたよ」

「うん……ありがとう」

覇気のない声でお礼を述べ、ねみみは水をのどに流し込む。
そんな彼女の様子に、友樹は思わず心配の声をかけていた。

「どうかしたの？ 大丈夫？」

「ん……大丈夫ですのん。でも、友樹ちゃんこそ、大丈夫です？」

「え？ ボクは、べつに……今は大丈夫だけど」

急に自分のことを訊かれて、友樹はちよつと驚く。

「そうですか？ 男子たちに、からかわれたりしてますですよ？」

「ん、でも蛍風くんたちののは、そんなに嫌なわけじゃ……。って、べつに、蛍風くんのことを、どうこう思ってるわけじゃないからね！？」

ほのかに赤くなり、ぱたぱたと両手を振りながら、友樹は否定の声を上げる。

ねみみはそんな友樹に対し、根掘り葉掘りといった様子でさらに質問攻めを続けた。

「あは、わかってますです。でも、それじゃあ、松園寺さんたちはどうですのん？ たまに、黒い波動のようなものを感じるんですねんけど」

（……松園寺さんたちのこと、気づいてはいるんだ……。いつもねみみちゃんのいないときに呼び出されるし、最近は呼び出されて戻ってきて、ねみみちゃん、教室にいないことが多いのに……）

友樹は若干眉をひそめて、そんなことを考えてしまう。

しかし、

「うん……。ちょっと、その、意地悪なと言われてたりとかはあるけど……。でも、大丈夫、だよ……。？」

嘘をついていることになるかもしれない、そんな思いが働いたのか少し言葉に詰まってしまったものの、友樹はねみみの質問に答えを返していた。

「そうですのねん。……友樹ちゃんは、強いですのん」

「強くなんてないよ……。でも、ねみみちゃん、ほんとにどうしたの？ 具合でも悪い？ あっ、もしかして、このあいだのお酒がまだ残ってるとか？」

弱気な口調のねみみに、心底心配している様子で言葉をかける友樹。

「それはもう、大丈夫だと思いますのん。ちょっと、いろいろ考えてしまっただけですのん。気にしないで」

そう言っただけで笑顔が浮かべるねみみではあったが、その表情はとても弱々しく思え、友樹はどうしても心配の念を消し去ることができなかった。

「ど～～～ん！」

「わっ、やめろよっ！」

「きゃあ！」

しんみりした雰囲気をぶち壊す侵入者が突撃してきたのは、そんなときだった。

いつもどおりといった感じではあるが、優助が笹雨を友樹のほうへと突き飛ばして、ふたりをくつつけさせるイタズラを実行したのだ。

椅子に座っていた友樹の上にのしかかるように、笹雨が倒れ込んでくる。

「うんうん、これでこそ、恋人同士だな！」

「そうだな」

薪も言葉を添えて優助とふたりがかりで囃し立てる。いつもどおりの光景。

「もう、ちょっと、やめてよ。っていうか、重いよ、蛍風くん……」

「う……ごめん、仲良さん！」

慌てて体をどけようとする笹雨の上に、さらにのしかかるように倒れ込んでくる優助。

「ど……ん！」

「うわっ！ 重いつてば！」

「痛っ。ちよっと、檜山くん、やめて……！」

「悪い悪い！ ちよっと、こけちゃったよ……！」

「嘘つけ！ お前、絶対わざとだろ……！」

「ははは、でも笹雨、あまり嫌がってるようには見えないぞ……？」

少々ふざけすぎなほどの優助のおどける声に、薪も、からかいの言葉をつけ加える。

「べ……べつに、ぼくは……！」

そんな男子たちの行動を、ねみみは黙って机に頬杖をついたまま眺めていた。

「ちょ……ちょっと、やめなさいよ！　ほんと、男子って子供なんだから！」

いつもどおりの騒がしさを取り戻しつつあった教室の片隅に、両手を腰に当てて注意を与える大きな声が響いた。

声の主は、瑞菜だった。

「光林さん……」

「まったく、杉崎くんまで一緒になって……。檜山くんこそそのかされたからって、言いなりになる必要なんてないんだよ？」

彼女はちらりと友樹に視線を送ったものの、すぐに薪のほうへと顔を向けて言葉を続ける。

「え？　いや、おれはべつに、そそのかされてなんて……」

「光林さん、それじゃおれが一方的に悪者みたいじゃなか！」

曖昧な否定を返す薪の声を遮って、優助が文句の言葉を瑞菜にぶつけた。

「わ……悪者でしょ？　無理矢理男子を女子に抱きつかせるなんて。セクハラ反対！」

「う、うるさいな！」

瑞菜の反撃に声を荒げるものの、そのあとが続かない。

彼女の言い分のほうが正論なのは、優助としてもわかっていているのだろう。

と、そんな一触即発といった状況の中、チャイムの音が響く。

「ちっ……っ！」

舌打ちの音を残しながら、内心では助かったと胸を撫で下ろす優助は、笹雨と薪を伴って自分の席へと戻っていった。

「ほんと嫌よね、男子たち。まったく、子供なんだから」

放課後の教室で、友樹の目の前でぷりぷりと怒りの言葉をこぼしているのは、休み時間にも男子のからかい行為に口を挟んで止めてくれた瑞菜だった。

ここ最近の放課後は吹奏楽部の練習が忙しいということで、こうやって話しかけてくれることも少なくなっていたのだが。

今日は練習が休みだから話したいと、チャイムが鳴って席に戻る直前に小声で言われていたのだ。

「うん、そうだね……。だけど、そんなにひどいことをしてくるわけじゃないし、ボク、あまり気にしてないから……」

遠慮がちに言葉を返す友樹。

瑞菜は友樹の前の席に座り、後ろ向きになって話しかけていた。友樹のさらに後ろの席であるねみみは、今は姿が見えない。

（姿を消して、寝てたりするのかな？　なんだか様子がおかしいみたいだったし、ちょっと心配だな……）

他人の心配をされていていいのかという気もするが、目の前でべらべらと言葉を並べる瑞菜に相づちを打ちながらも、友樹はねみみのことを考えていた。

それにしても、この瑞菜という女子生徒、一見するとおとなしい印象に思えるのだから、実際には喋り始めるとなかなか止まらない性格のようだ。

今の話題だと、少々悪口を含んだ嫌味な内容ということになってしまうかもしれないが、彼女は基本的に話すことが好きなのだろう。小学校の頃にいじめられていたというのも、タイミングが悪かったり、たまたま周囲に気の合う人がいなかったり、といった理由からなのだと考えられる。

そんな彼女ではあるが、友樹にこうして放課後や、最近では休み時間にも話しかけてきたりはするものの、一緒に帰ったり休みの日に一緒に遊んだりといったことまではしなかった。

しかし、友樹にはそれもよくわかっていた。

友樹が男子にからかわれたり、冬野たちのグループに呼び出されたりしていることは瑞菜も知っているのだから、自分までその対象になりたくはないのだろう。

小学校でいじめられていたという彼女なら、なおさら、その思いは強いはずだ。

それなのにこうやって話しかけてくれるだけでも、感謝しなくてはならない。

友樹は、そう考えていた。

ただなんとなく、彼女が話しかけてくるのが、男子たち、とくに笹雨、薪、優助の三人組がそばにるときばかりだということにも、気づき始めていた。

最近の話題も、だいたい彼らについてのことだった。

（もしかして光林さん、蛍風くんのこと、好きなのかな？ だからボクが蛍風くんとのことをからかわれてるのを見て、疎んでるとか……？）

一旦はそう考えたものの、なんか違う気がする、と友樹はそれを

否定する。

そこでさらにべつの可能性にまで考慮の域を広げられれば、真実に近づきそうなものではあるのだが、そこまで考えられるほどの鋭さを、彼女はやはり持ち合わせていなかった。

相変わらず、友樹は激しく鈍感なのだ。

「仲良さんがそんなふうに曖昧な感じだから、あいつらもつけ上がるんだよ？ もっと、びしっと言ってやらないと！」

「う……うん……。でも、大声を上げるのも、恥ずかしいし……」

弱気な友樹の返事に、ため息をつくばかりの瑞菜だった。

と、そのとき。

ガラッ！

乱暴にドアを開ける音が響いたかと思うと、つかつかと大きな足音を立てて、四人の女子生徒が教室に入ってきた。

彼女たちは一直線に友樹の席を目指す。

もちろんその四人とは、腕を組んでいつもの偉そうな態度のまま歩く冬野を筆頭に、彼女の少し後ろに続く取り巻きたち——唯、幸緒、美春だった。

「……あら、光林さん……？」

近くまで来てからようやくその存在に気づいたように、冬野が瑞菜を一瞥する。

——あなた、ここだなにをしているの？

そんな威圧感を込めた視線を受け、瑞菜は身をすくませる。

「わ……わたしは、これで……！」

そそくさと自分の席に戻りカバンをつかむと、彼女はそのまま振り返りもせずに教室から飛び出していった。

「ふん……」

瑞菜を目で追っていた冬野は、微かなつぶやきをこぼす。

「……松園寺さん、いつたい、なんですか……？」

友樹は冬野から向けられている、いつも以上の冷たい視線に少々たじろぎながらも、そう虚勢を張って言い放つ。

瑞菜のことを、嫌なものを見たといった目で睨んでいるように感じた友樹は、とりあえず冬野の気を自分のほうに引こうと考えたのだ。

そんな友樹に視線を向け直した冬野は、乱暴に友樹の腕をつかむ。

「い……痛いっ……です……！」

友樹が声を上げて抵抗しようとするのも構わず、冬野は黙ったまま彼女を引っ張って歩き始めた。

前からは冬野に腕を引っ張られ、背後には三人組がついて背中や肩を押されているこの状況では、友樹に抵抗するすべは残されていなかった。

冬野は黙々と友樹の腕を引っ張り、歩き続ける。

厚い雲に覆われた空は薄暗く、夕方だというのに宵闇に包まれ始めているかのようにだった。

友樹は強引に腕を引かれ、上履きのまま外へと連れ出される。

そのまま裏庭を通って、しばらく前にも連れ込まれた体育倉庫の裏で、冬野は歩みを止めた。

「大声、出すんじゃないわよ」

「は……はい……」

いつもにも増して迫力のある冬野の勢いに圧されてしまったのか、友樹は微かに震えながら服従の声を返す。

しばらく、その場で無言の時間が流れた。

やがて、運動部の生徒がボールなどをしまいに来たのか、体育倉庫に入っていく。

数人の足音と笑い声などが響いたあと、スライド式のドアを閉め、カギをかける音が聞こえる。そしてすぐに、足音は遠ざかっていった。

「……冬野、もう大丈夫そうだよ」

校庭の様子をうかがっていた唯が声を上げると、冬野は再び、黙って友樹を引っ張り始める。

そして素早く体育倉庫の前に回り込むと、唯はカギを外してドアを開けた。

「どうして、カギを……」

「部活ごとに持たせてあるくらいだもの、予備だってあるのよ」

そう言いながら、友樹を体育倉庫の中へと引つ張り込む冬野。

彼女は自らも薄暗い倉庫に入り、友樹が怯えた目を向けるのも意に介さず、つかんでいた腕を振り回すようにして突き飛ばした。

「きゃっ……、むぐ……!？」

友樹は陸上で使われる高飛び用のマットの上に転がる。と同時に、美春と幸緒がふたりがかりで友樹を押さえ込んだ。

そして背後から組みついた幸緒によって、友樹はタオルを猿ぐつわのように巻きつけられる。

「ん……んん~~~~~!」

悲鳴を上げようとしても、まったく声にならない。

ちよつとした音としての認識はできるだろうが、校庭からはもう誰もいなくなっている。近くに人がいない今、この程度の音では気づかれるはずもなかった。

「仲良さん、あたしが前に忠告したこと、覚えていないのかしら？」

友樹を激しく睨みつけながら、冬野は低く声を響かせる。

「笹雨くんには近づくなつて、言つたわよねえ？」

冬野は押さえられて動けない友樹に顔をぐつと近づけ、眉をつり上げながら怒りを溶け込ませた言葉をぶつけてくる。

「きゃはは、出た出た、必殺やきもち焼き！」

思わず茶々を入れ、慌てて口をつぐんでいる唯を、冬野はギロリと睨みつけた。

「と……とにかく、あまり調子に乗っているとこっぴどい目に遭うんだってこと、よく覚えておきなさい！」

（ボ……ボク、べつにそんなつもりないよ！ 蛍風くんのことだつて、檜山くんとかがいろいろと言ってるだけで、べつになにもないから！）

口を塞がれているので言い返すことはできないが、友樹は涙目になってそう訴えかける。

もちろんそんな訴えが、今の冬野に通じるはずもない。
それどころか、

「反抗的な目をするんじゃないわよ！」

バシッ！

冬野は声を荒げると、友樹の頬が赤くなるほどの勢いで、ピンタをお見舞いする。

友樹はマットに顔をうずめ、ただひたすら涙を流していた。

「……ちよつと冬野、傷とかアザとかが残るようなのは、やめておかないと。冬野自身がいつもそう言ってるじゃん」

「う……うるさいわね！ わかってるわよ！」

唯からの忠告に、冬野は真っ赤な顔になって言い返す。

彼女の視線はすぐに、マットに突っ伏している友樹へと向けられた。

「……ふんっ！ 泣けば許してもらえるなんて、思わないでよね！」

続けてそう言いながらも、冬野は友樹に再び手を上げたりはしなかった。

「そうだわ。このあいだの写真あるでしょ？ あれ、唯のケータイだけじゃなくて、あたしと幸緒と美春のケータイにも転送してあるからね。あなたが妙なことしたら、すぐにでもばら撒けるんだから！」

冬野の声を、ただ涙を流しながら聞き続けるしか、成すすべのない友樹。

反抗する気力すら失くした彼女の様子を見て、興ざめしてきたのだろうか、冬野は取り巻き三人組に号令をかける。

「ま、今日は帰りましょう」

「ラジャー！」

まず初めに冬野が体育倉庫を出たあと、三人組も押さえつけていた友樹から離れると、素早くドアをくぐって外へ出た。

友樹もののろと立ち上がり、そのあとに続こうとして、

「それじゃ、おやすみ」

ふっ。

冬野の冷たい笑顔が、体育倉庫のドアのすき間から、消えた。

他の三人によって、ドアが閉められたのだ。

そして、ガチャツ、と軽い音を響かせ、カギがかけられる。

友樹は焦ってドアの前まで駆け寄るが、ドアをスライドさせようとしても、びくともしなかった。

「ん~~~~、ん~~~~~~~~!!」

思いきり大声を上げて冬野たちに呼びかける友樹だったが、タオルが巻きつけられたままで声にならなかった。

「言つとくけど、告げ口とかしたらどうなるか……なんて、わざわざ言つまでもないわよね？ ふふふ……」

念を押す冬野の声を残し、彼女たちの足音は止まることなく遠ざかり、やがて、消えていった。

真っ暗になった体育倉庫に取り残された友樹は、何度もドアを引っ張ったり叩いたりするが、どうにもなる気配はない。

考えてみたら、タオルは巻きつけられていたものの、腕は自由になるのだからすぐに外せるじゃないか。

友樹がそのことに気づいたのは、少し時間が経ってからだった。

それから、友樹はどうにかドアを開けようとあがき続け、助けを呼ぼうと何度も大声を張り上げた。

しかし結局ドアは開かず、誰も助けに来てはくれなかった。

やがて疲れ果てた友樹は、再びマットに身を沈めるとすすり泣きを始める。

そのまま、どれくらいの間時間が経っただろうか。おなかも音を立て始める頃合いになっていた。

「どうしてボクがこんなこと、されなくちゃならないの……？ 誰か、助けて……」

何度も繰り返されている、助けを求める友樹のつぶやきは、誰のもとへも届きはしなかった。

(……松園寺さんたちさえ、いなければ……！)

ついそんな黒い思念までもが、友樹の心に湧き上がってくる。

と――。

(……………？)

不意に友樹は起き上がる。

(今、声が聞こえたような……？)

友樹は気力を振りしぼって立ち上がると、ドアまで駆け寄り、ドンドンとがむしゃらに叩き、大声を上げ始めた。

闇夜に響く、ドアを叩き続ける音と、女の子の大声。

しかし近くには、やはり誰もいなかった。

学校というものは、田んぼや畑の真ん中に建っていることが多い。友樹の通うこの学校もそんな立地だったため、近くの民家まではかなりの距離がある。

その上、もともと人口も少ない田舎町なのだから、たまたま付近を通りかかるような人もまずいない。

激しくドアを叩く音も、友樹の悲痛な声も、結局誰にも聞きつけられることはなかった。

（やっぱり、ダメだ……）

諦めかけたそのとき、月明かりが友樹の瞳をまぶしく照らす。

（……………あつ、そうか！）

体育倉庫の奥側の壁、少し高い部分にはあるが、窓がついてい
るということに、友樹はようやく気づいた。

人が通るには小さすぎるくらいの小窓ではあった。とはいえ、小
柄な友樹ならばどうにか通ることができるだろう。……大きな胸が
若干つつかえそうではあったが。

窓は高い位置にあったため、マットや跳び箱などを使って階段を
作り、友樹は窓に手をかけることができた。

カギがかかっていたが、内側からなら窓のカギはすぐに開けられ
る。

友樹はカギを開けて窓から下をのぞき込んでみた。

このまま頭から出ると、逆さまに落ちて地面に頭をぶつけてしま
うだろう。

そう考えた友樹は足から窓をぐぐり、見事、体育倉庫の裏に出る
ことができた。

着地に失敗して尻餅をついてはしまったものの、友樹は腰をさす
りながら、ふらふらと立ち上がる。

彼女は教室までカバンを取りに戻ったが、ねみみの姿はなかった。

友樹は月夜が照らし出す通学路を、ひとり寂しく帰っていく。
涙を流しながら歩く彼女の姿は、誰の目にも留まることはなかつ
た。

午後の眠い授業をひとつ終え、休み時間になった。あとは六時間目を残すのみ。

眠気も最高潮に達するこの時間。

最後の戦いへと赴く前準備よろしく、友樹はトイレに向かっていた。

彼女のクラス、一年六組は校舎四階の端にある物置部屋の隣だった。

物置部屋は普通の教室の半分程度の広さで、様々な荷物を一時的に置いておくための倉庫となっている。

その物置部屋の正面には女子トイレがあり、さらに隣には人通りのあまり多くない階段があった。

階段を上げれば屋上だが、外に出るためのドアはいつも閉められている。友樹が何度か冬野たちに呼び出されていたあの場所だ。

ちなみに、階段の隣には水飲み場があり、その先に男子トイレがあった。

友樹のクラスからだといれは近い場所にある。そのため、予鈴までそれほど間がない時間にもかかわらず、友樹は急ぐこともなくゆっくりと歩いていた。

辺りに人影はない。

トイレは同じ階の反対側にもあるため、あまり混み合うことはないのだ。

教室の後ろ側のドアから出た友樹は、右側通行の廊下を、右手に水飲み場を臨みながら歩く。

水飲み場の先には階段があり、その向こうが目指す女子トイレだ。友樹は無意識に廊下の一番端っこを歩いていく。それは、彼女のおとなしい性格を如実に示していると言えるのかもしれない。

水飲み場の前を歩き終え、友樹の右手に階段へと続く微かな空間が広がる。

と、突然。

「きゃっ！？」

右足になにかが引つかかった。

そう思い至ったそのときにはすでに、友樹の体は前につんのめっていた。

引つかかったなにかに足を取られる形でバランスを崩し、友樹はそのまま、右側にある階段のほうへと倒れ込んでいく。

その階段の下から、三人の人影が迫る。

それは、ちょうど下の階から戻ってきた、笹雨、薪、優助だった。

「わっ！？」

「なんだ……！？」

「きゃう！」

人影のひとつに思いつきりぶつかり、声を上げる友樹。

ぶつかった勢いで、友樹はどうにか倒れないで済んだのだが。

「う……うわ……！」

友樹にぶつかられた笹雨は反動で吹き飛ばされ、そのまま背後の階段を、激しい音を立てながら転げ落ちた。

ドサリ。

鈍い音を残し、笹雨の体は階段を下った踊り場にぐったりと横たわる。

「な……、笹雨！」

「おい、大丈夫か！？」

薪と優助はすぐに状況を理解して、階段の下に倒れている笹雨のもとへと駆けつける。

優助が笹雨の肩を揺さぶって呼びかけるが、笹雨の返事はない。じわり……と、真っ赤な血が笹雨の頭から流れ出し、踊り場に広がっていくのが、友樹の目にも映った。

「笹雨！ しっかりしろ！」

優助の悲痛な叫び声が響く中、友樹は足が震え、階段の上から呆然とその様子を見続けることしかできない。

ふと視線を下ろすと、足もとにはロープが落ちていた。

片方は階段の横の壁にガムテープで貼りつけられ、もう片方は廊下の中ほどで微かに渦を巻くように残されている。

その視線の先、物置部屋のドアは、開け放たれていた。

普段は閉められたままになっている物置部屋のドア。気にしてはいなかったが、おそらくさっきまでは開いていなかったはずだ。とすると、そこに隠れていた誰かが、友樹がここを通り抜けるタイミングでロープを引っ張って、転ばせようとしたということになる。

そして混乱に乗じて、その誰かはドアを開けて逃げたのだろう。

「仲良さん、どうしたの？ ……あ……あれ、蛍風くん！？」

騒ぎを聞きつけて様子を見に来た瑞菜が、友樹の横で階段下に目を向け、口の前に両手を当てて驚きの声を上げる。

それに続いて、他のクラスメイトたちも続々と集まってきた。

そんな人垣の中に、ひときわ青ざめた顔で立ち尽くす冬野と、彼女に寄り添う取り巻き三人組の姿もあった。

「笹雨くん……」

震える声でつぶやき崩れ落ちそうになる冬野を、幸緒と美春がふたりがかりで支える。

「大丈夫だよ、きっと……」

唯は、自分にも言い聞かせているといった雰囲気で、そうささやきかけていた。

階段の下では、血を流して倒れたままの笹雨に必死に呼びかける優助たちの声が、まだ響き続けている。

やがて救急隊が駆けつけると、笹雨は気を失ったままタンカに乗せられ、救急車で病院へと運ばれていった。

「先生は残念でなりません……」

静まり返った生徒たちの前で、森母先生が泣きそうな声を上げる。

あのあと、六時間目の授業は自習となった。

友樹たちのクラスの担任である森母先生が受け持つ、国語の授業だったからだ。

おそらくは、いろいろと状況を訊かれたりしていたのだろう。

帰りのホームルームの時間になると、沈んだ表情を浮かべながら先生は教室に入ってきた。

そしてクラス全員が沈黙する中、彼女は話し始めたのだ。

「まずは、心配していると思いますので蛍風くんの状態についてですが、出血はしていたもののすぐに意識を取り戻したようです。精密な検査をするまでは安心できないと思いますが、今のところ深刻なケガではなさそうとのことですよ」

先生の声に、安堵の息を漏らすクラスメイトたち。

友樹もほっと胸を撫で下ろす。

「ですが！」

騒がしくなり始めていた教室に喝を入れるように、森母先生は声を張り上げた。

そして、

「先生は残念でなりません」

先ほども言ったセリフを、もう一度繰り返す。

「このクラスに、いじめがあつたなんて……」

ざわざわ。ざわ。

生徒たちにざわめきが広がる。

「階段の近くにロープが残されていました。誰かがそれを使って、足を引っかけたようです。すぐにみんな教室を出て階段に集まったのですから、犯人はその中に紛れ込んでいたということになります」

犯人。

その響きに、身を固くする生徒たち。

「そんないじめを、このクラスの誰かがしていたなんて……」

声を震わせながら、先生は話し続けていた。

いじめ――。

そのことについて思い当たるふしが、生徒たちのそれぞれに少なからずあるのだろう。

そしてみんな、おそらく同じことを考えたに違いない。

最近はそのほどでもなかったものの、おとなしくてクラスで孤立している様子だった、友樹のことを。

実際どうなのかはわからないままに、面白半分で笹雨との仲を冷やかしたりして楽しんでいたことを思い出した人も、中にはいるはずだ。

だが森母先生から続けられた言葉は、そんな生徒たちの考えに反するものだった。

「蛍風くんが、いじめられていたなんて。先生は全然気づきませんでした」

ざわ……。

声が、一瞬だけピタリと止まる。

「蛍風くんは、おとなしい子ですから、我慢していたんでしょうね」

涙目をハンカチで拭いながら、見当外れの言葉をこぼし続ける森母先生。

先生らしいといえば先生らしい、勘違い。

生徒たちのざわめきは、一瞬だけ止まったものの、すぐもとおりになった。

そんな喧騒の中、友樹は考える。

笹雨は巻き添いを食っただけで、いじめられていたわけではない。いじめられていたのは、友樹のほうだ。

とはいえ――。

それを正すためには、自分のことを話さなければならぬ。

冬野たちに呼び出され、嫌がらせされていたことを。

しかし、ある程度気づいている人もいるかもしれないが、今のところ、他の人がいるときにいじめられたりはしていない。

それに友樹は、告げ口などをしないように何度も念を押されている。

自分がいじめを受けているのだということを、正直に先生に話す
勇氣は、今の友樹にはなかった。

ふと、友樹は視線を向ける。

自分をいじめている張本人である、冬野に。

彼女は笹雨が階段から落ちて倒れたのを見てから、ずっと青ざめた顔で落ち込んでいる様子だった。

それを、隣の席の唯がなだめる。そんな状態が続いていた。

（やっぱりあれは、松園寺さんたちがやったのかな……）

友樹を目の仇にして、呼び出したり、体育倉庫に閉じ込めたりしていた彼女たち。

ロープを仕掛けて転ばそうとするくらいのことは、躊躇なくやってのけるだろうと思われた。

階段を下りている途中でロープを引っかけたり背中を押ししたり、といった悪質なことでまでやらないところも、冬野らしいと言えなくもない。

（そうに、違いないよね……）

証拠はまったくなかったものの、友樹は確信に近い思いを抱いていた。

（でもそれなら、事故だったとはいえ、蛍風くんをケガさせてしまったのは自分のせいじゃない。それなのに、どうしてあんなに青くなってるのよ）

冬野に対して怒りの念が込み上げてくる。

（松園寺さんは、蛍風くんのことを気に入ってるみたいだもんね。自分がケガをさせてしまったことで、怖くなっちゃったとか、そんな感じなんだよね、きっと）

なんて自分勝手な人だろう。思わず友樹は冬野を睨みつけてしま
う。

と、そんな友樹の目に、瑞菜の顔が映る。

彼女の席は、冬野の斜め前だった。

瑞菜は友樹のほうを見ていたようだったが、冬野のほうを睨みつ
ける視線に気づいたからなのか、慌てて前に向き直ってしまった。

「あなたのせいよ!」

友樹はいつものごとく、屋上へと続くドアの前に呼び出されるなり、頭上から罵声を浴びせられた。

もちろん声の主は冬野。いつもどおり、取り巻きの三人もすぐ脇に控えている。

「あなたのせいで、笹雨くんはあんなことに……!」

取りつく島もなく、続けざまに罵声を繰り返す冬野の勢いに、友樹は少々たじろいだ。

「あなたが落ちればよかったのよ!」

そんな友樹の様子など気にも留めず、冬野は叫び続けた。

いくら寂れた階段の上で、すぐ下の四階の階段前が物置部屋になっ
ていたとはいえ、その隣が友樹や冬野たちの教室なのだ。

放課後だからすでに教室を出ている人のほうが多そうではあるが、
それでも教室に残って喋ったりしている生徒くらい、まだいてもお
かしくない時間だろう。

それなのに、こんな大声でわめき散らすなんて。

友樹としてみれば、冬野の声に誰かが気づいてくれれば助けでも
らえる可能性もゼロではないのだから、むしろそれはありがたいく
らいのはずだ。

にもかかわらず友樹は、冬野をある意味哀れみの目で見つめてい

た。

これだけの怒声をぶつけられながらも、意外なほど友樹は冷静だった。

友樹自身、どうして怯えることなく、こつも冷静でいられるのか、よくわからなかったのだが。

ともあれ、友樹は冬野に険しい視線を向ける。

「……やっぱりあれは、あなたたちがやったのね？」

そして、ひとしきり罵声を吐き出し荒い息をついていた冬野に向けて、そう言い放った。

「ち……違っわよ！」

多少言葉を詰まらせながらも、はっきりと否定する冬野。

「嘘っ！」

冬野たちが犯人だと確信している友樹は、すかさず力強い言葉を返す。

「嘘じゃないわ！」

しかし対する冬野のほうも、相手が友樹だからなのか、まったく引き下らない。

「だいたい、どうして笹雨くんがあんな目に遭うのよ！　あなたがいたからでしょ！？」

彼女は声を激しく荒げ、友樹に言いがかりをつけるような言葉を向けてくる。

ロープで転ばされたとはいえ、階段を上がってきた笹雨にぶつかり、結果、突き落とす形になってしまった。

そう考えると、友樹にもまったく非がないとは言いきれないのかもしれない。

そもそも、もっと足もとに注意していれば、あんなイタズラに引っかかったりもしなかっただろう。

とはいえ、だからといって、自分が悪かったと冬野に頭を下げるなんてことはできない。

実際に友樹自身もいじめの被害者なのだから、ここで引き下がるわけにいかないのは当然だ。

しかし冬野は、さらに友樹を攻撃する。

——冬野本人ですら、思いもよらなかった言葉で。

「あなたが！……あなたが、取り憑かれてるからでしょ！？」

「え？」

友樹は一瞬、なにを言われたのか理解できずに、目を丸くする。

取り巻きの三人も、冬野がなにを言っているのかわからず、呆然とする。

そしてそれは、言葉を発した当の本人も同じだった。

「あれ？ あたし、なにを……？」

冬野はその顔にありありと焦りの表情を浮かべながらも、どうに

か次の言葉を探し、しぼり出した。

「と……とにかく！　あたしは笹雨くんに危害を加えたりなんて、絶対にしないわ！」

話をもとの方向に戻し、冬野は焦りを隠すかのように強い口調で言い放つ。

そんな彼女に対し、友樹はさらに責め立てるような言葉をぶつける。

「ボクの足にロープを引っかけたから、結果的にそうなったんだよ？　松園寺さんは自分が蛍風くんを傷つけてしまったことを認めるのが怖くて、現実から目を逸らしてるだけなんじゃないの！？」

いつもの友樹からは想像もできない勢いに、言葉を向けられている冬野だけでなく、取り巻き三人組も哑然としていた。

いや、それは彼女たちだけに限ったことではなかった。

（あれ？　ボク、ここまで言うつもりなんて、全然なかったのに……）

あれだけの勢いでまくし立てていた友樹自身も、困惑を隠せないようだ。

だが冬野は、あまりに強気な友樹の言葉によって、すっかり戦意を喪失していた。

「な……なによ！　お……覚えておきなさい！」

そんな捨てゼリフを吐いて、冬野はすごすごと足早に退散していく。

「ちょ……待つてよ、冬野！」

唯たち取り巻き三人も、そそくさとそのあとを追って階段を下りていった。

ひとり残された友樹は、ただ立ち尽くしていた。

（ボク、どうしちゃったんだろう……？）

いじめっ子からの呼び出しに、いわば勝ったという今の状況ではあるものの、友樹の心はどんよりと曇っていた。

先ほどの、自分の意思とは思えないほどの勢いで放たれた言葉。友樹は、自分が自分でなくなってしまったような、そんな言い知れぬ不安に包まれ始めていた。

しかし、いくら考えても、どうなるものでもない。

「……とりあえず、戻ろう……」

友樹はゆっくりと階段を下り、教室に入る。教室の中は、ひっそりと静まり返っていた。

「ねみみちゃん、今日もいない……」

友達になってくれたはずのねみみ。

友樹はそんな彼女に、すがりつきたい衝動に駆られていた。
こういうときに限って、ねみみは姿を見せてくれない。

寂しい思いに包まれながら、友樹はカバンを手に取り、家に帰っていった。

友樹がゆっくりと階段を下りていったあと。
誰もいなくなったはずの、屋上に出るドアの前。

そのドアの窓から差しこ込む陽の赤さが辺りを照らし出すだけの
寂しいその場所には、なぜか微かな笑い声だけが響き渡っていた。

次の朝、ホームルーム前の時間のことだった。

友樹が席に着くと、待ち構えていたかのように、薪と優助のふたりが駆け寄ってきた。

「仲良さん、大丈夫？」

「え？」

優助の唐突な質問に、疑問符を浮かべる友樹。

ただ、それよりももっと気になることが、友樹に別の言葉を口走らせる。

「……って、檜山くん、なんか、においが……」

優助から漂う、強烈なにおい、それは――。

「あつ、すまん。朝、家の手伝いをしてきたから、お酒のにおいが残ってるんだな。……そんなに、におうか？」

彼の家は檜山酒造という酒屋だから、手伝いで酒蔵にでも入ったということなのだろう。

「うん、少し……。でも、大丈夫って、どうして……？」

においの原因がわかったためか、友樹は最初の質問についての話題に切り替える。

「えっとね、昨日おれたち、笹雨のお見舞いに行ってきたんだ。笹

雨、結構元気そうだったよ。頭のケガも心配なさそうだった」

すっと一歩前に出て、薪が質問に答えた。

「そっか……。よかったあ」

友樹は安堵の息を吐く。

「それでな、ロープのことがあったとはいえ、仲良さんがぶつかって笹雨が階段を落ちたって感じだっただろ？ だから、責任を感じてるんじゃないかって、笹雨はすごく心配してたんだ」

優助が詳しく解説を加える。

「そ……そうなんだ……。でも、ボクは大丈夫。……ていうか、ボクって冷たい人間なのかも……。今の今まで、全然そんなふうに考えもしてなかった……」

ついつい沈んだ表情になってしまう友樹を、

「いやいや、気にしないでいいんだって。ごめん、こんなこと言わなきゃよかったね。でも、笹雨は大丈夫だから、心配しないでいいよ」

薪はそっと肩に手を乗せて慰める。

「うん……。ありがと、杉崎くん」

すぐにチャイムが鳴り森母先生が教室に入ってきたため、薪と優助は自分の席に戻っていった。

その背中を見送る友樹の背後では、ねみみが机に突っ伏して眠っていた。

「……えーっと、それじゃあ……。むっ、こら、倉梳さん！ 居眠りなんて、してちゃダメですよ！」

森母先生が、コツン、と教科書のカドで軽くねみみの頭を叩く。

「ふあ……ふあーい……」

なんとか起き上がるねみみではあったが、その目は眠気に負けて、まるで横線一本のようになっていた。

「……ねみみちゃん、どうしたの？ ……なんだか、すごく眠そう……」

休み時間になるとすぐ、友樹は後ろを向き、ねみみに話しかけてみた。

「うみゅー……。そうなんですのん。なんだかとっても、眠いんですねん……。すーすー」

ねみみはそう言葉を返しながらもうつらうつらと舟を漕ぎ、言い終わるか終わらないかのうちに再び机に突っ伏すと、寝息を立て始めてしまった。

笹雨が階段から転げ落ちたあの一件があり、勘違いしていたとはいえ、いじめがあつたという事実を森母先生がクラスに訴えかけた。それによって、最近は友樹に対するいじめ行為やからかいの声は、鳴りを潜めていた。

しかし、それは表面上のことではなかった。

先生やクラスメイトに見つからないように隠れて行われるいじめは、そのあともしつかりと続いていたのだ。

以前とは少し変わつていえるかもしれないが、友樹本人にも姿を見せずに行われるいじめ。

カバンや教科書、ノート、筆入れ、上履きなどが隠されたり。

机やロッカー、下駄箱の中に、雑巾だとか泥まみれのカエルだとか、汚いものが入れられていたり。

いまいち低レベルとも思える、そういったいじめの数々が、今の友樹には襲いかかってきていた。

友樹は冬野から呼び出しを受けて念を押されたからなのか、そういつたいいじめを受けていることを、他の人に話したりはしなかった。このあいだの冬野に対する強い勢いはなんだったのかと思うほど、以前と変わらない弱気な友樹。

ねみみになれば泣き言をこぼせるかもしれないのだが、朝からずっと眠そうにしていた彼女は、休み時間には完全に眠りこけていた。

また、冬野からの呼び出しも、相変わらず続いている。

放課後となつた今、友樹はまたもや冬野に呼び出され、いつもの

場所、屋上へと出るドアの前で彼女たちと対峙していた。

「今日は随分おとなしかったじゃない？ とりあえずは、ちゃんと
言いつけを守ってるのね。ものわかりがよくて嬉しいわ。でも、何
度も言ってるけど、誰かに話したらひどいことになるって、しっか
り心に刻んでおきなさいよ」

いつもどおり腕を組んで取り巻きの三人を従えたまま、冬野は高
圧的な口調で言い放つ。

対する友樹は、遠慮がちな声で言葉を返した。

「……ほ……蛍風くんみたいに……？」
「……………」

その友樹の言葉に、なにか言いたそうな表情は浮かべるものの、
冬野は声を返すことができないようだった。

「……やっぱり……松園寺さんたちが犯人なのね……？」

小さく、微かに震える声ではあったが、友樹はさらに冬野を責め
立てる。

「ち……違っつて言ったでしょ！？」

声を荒げた冬野は、右手を振り上げる。
バシン！

大きな音を響かせ、彼女の手のひらが友樹の頬を鋭く打ちつけた。
叩かれた友樹の頬は、みるみるうちに赤くなっていく。

「ちよっと冬野、暴力はまずいよ。バレやすいってば。この前も言

ったでしょ？」

「わ……わかってるわよ！」

見かねた唯に諭されるも、冬野は強がりの言葉を吐き出すのみ。しかしそれで、どうにか少しは落ち着きを取り戻したようだ。

友樹は叩かれた頬を手で押さえながら、冬野に視線を向ける。

そんな友樹に、冬野は唐突な質問を投げかけた。

「……ところで仲良さん、倉梳さんっていったい、何者なの？」

「え？　ねみみちゃん……？　……何者って、クラスメイトでしょ？」

あまりにも唐突なその質問に、思わず泡を食ったような顔をしてしまう友樹だったが、焦りを押し殺し、どうにか言葉を返す。

友樹はねみみが教室を貫く「吸血樹」に宿った精霊だと知っている。だが、それを他人に話してしまうわけにはいかないと考えていた。

ねみみから口止めされているわけではないが、精霊の力とやらを使って記憶を操作しているみたいだったのだから。

しかしなぜ、冬野はこんな質問をしてくるのか。ねみみが力の影響力が弱まっているということなのだろうか。

考えてみれば、なんとなくではあるが、最初から冬野はねみみに対して疑念を抱いているようではあった。

そうやって考えを巡らせる友樹に、冬野はキッと睨みつけるような視線を向けている。

「ちよつと冬野、なに言ってるの？」

取り巻き三人組は、冬野の言葉に首をかしげていた。

「もしかして、おかしくなっちゃった？」

「それは、もとからじゃ……」

「ちょ……！　なんですって！？」

三人組のとぼけたような軽口に、冬野は睨みを利かせる対象を変える。

友樹は怒りの矛先が変わってくれて、少しだけほっとしていた。

「ふ……ふん！　今日のところは、これくらいにしといてあげるわ！」

悪役丸出しといった感じの捨てゼリフを残し、冬野は取り巻きたちともども、その場を去っていった。

友樹に対するいじめや嫌がらせ行為は、なおも続いていた。

冬野に脅されているため、友樹は誰にもそのことを話さず、ただ我慢し、耐え続けていた。

いつもの呼び出しとはちょっと違ってはいたものの、机の中にゴミや汚れたものを入れられたり、上履きを隠されたりといった、最近の嫌がらせも、きっと冬野たちがやっているのだらうと、友樹は考えていた。

しかし――。

ふと、トイレから戻ってきた友樹が教室のドアから中に目を向けると、友樹の席のそばに瑞菜が立っていて、なにかを机の中に入れている姿が目映った。

(……え？ 光林さん……？)

彼女は友樹が教室へと足を踏み入れる前に、そそくさと自分の席に戻っていった。

(……なんだろう……？)

なんとなく嫌な予感を覚えながら、友樹は席に着く。

そして、そっと机の中をのぞいてみると……。

普段、友樹は几帳面に教科書を左、ノートを右、というふうに机の中に並べていた。

重なる順番も、上から時間割どおりに重ね、使い終わったら一番

下に移動させる。

それは、小学校の頃からずっと続けている、友樹なりのルールだ。

それなのに、前の時間の授業だった英語のノートが、一番上に、そして教科書側に重ねてあった。

友樹はおそろおそろそのノートを机の上に取り出し、開いて中を確認してみる。

すると――。

ぐちゃぐちゃの線が、真っ白いノートの使っていないページ一面にびっしりと描き込まれていた。

何枚かページをめくってみるが、ノートの後ろ側から何枚分かのページにわたって、その線は描き込まれている。

黒板の文字を写したページにまでは描かれていなかったため、それほどの手ではなにかもしれないが、それでもそういったことをされたという事実が、友樹の胸を痛めつける。

線は鉛筆で描かれているだけのようだった。それに気づいた友樹は、消しゴムを取り出し必死に消し始めた。

ゴシゴシと線をこすっていく友樹。だが、どういわけか線は余計に増えてしまった。

消しゴムの中に、数本のシャープペンの芯が刺し込まれていたのだ。

(……もう！　こんなことまでして……！)

苛立ちながらも芯を消しゴムから引き抜き、ノートの線をせつせと消していく。

線を消しながら、友樹は考えていた。

(……さっきの光林さんの様子……。もしかしてこれって、光林さんがやったの……？　だとすると、最近の嫌がらせって、もしかしたら全部、光林さんが……？)

友樹は瑞菜に疑いの視線を向けるが、彼女はなにともなかったかのように次の授業の準備を整えていた。

体育の授業が終わり、友樹は女子更衣室へと向かう。
と、その更衣室から、心なしか周りを気にしながらという様相の瑞菜が出てきたかと思うと、足早にその場を去っていった。

(……………)

更衣室のロッカー自体には、カギがついてない。
部屋のドアにあるカギを最後に出た人がかけ、授業が終わったらその人が最初に戻ってきてカギを開けることになっているだけだ。

嫌な予感を振り払い、友樹は急いで更衣室の中へと入り、ロッカーにしまってた自分の制服を確認する。

制服を手に取り全体を見回してみたが、とくにおかしな部分は見当たらなかった。

(……光林さん、単に急いでただけだね……。ボクったら、人を疑うなんて……)

友樹は安堵の息をつく、体操着を脱ぎ、制服へと着替えていく。

するするする……。

スカートを履き、制服の袖に腕を通す友樹。

と、スカートの下から伸びる自分の足と、袖口から出てきた自分の腕が、真っ赤に染まっていることに気づいた。

「きゃっ……!？」

思わず驚きの声を上げてしまう。

腕を真っ赤に染めているのは、血——ではなく……。

(このにおい……トマトケチャップ?)

友樹は制服を裏返して確認してみる。

すると、上着の袖の内側とスカートの内側に、べったりとトマトケチャップが塗られていた。

いくら危害を加えるようなものではないとはいえ、こんなにも嫌がらせが続くと、精神的にもまいってくる。

だがそれ以上に、友樹にとっては深刻な問題だった。

(これ、やっぱり光林さんがやったんだ……。おとなしいボクなんか話しかけてくれて、いい人だと思ってたのに……。ボク、裏切られたんだ……。！)

優しい言葉をかけてくれていた瑞菜。

友達だと思っていた彼女に裏切られたということに、友樹は打ちひしがれていた。

瑞菜からと思われる嫌がらせは、さらに続いた。

教科書やノートが教室のゴミ箱に捨ててあったり、友樹のロッカーの中にゴミが入っていたり。

嫌がらせ行為を仕掛けている場面を直接見たわけではないものの、瑞菜がその場所から足早に去ったあと、そういった嫌がらせを発見することが多かった。

瑞菜が犯人だと、友樹はほぼ確信していた。

だが、本人を直接問い質すことまでは友樹にはできず、ただ耐え続けていた。

そんなある日の放課後。

焦りの表情を浮かべた薪が、教室に飛び込んできた。

「仲良さん！ 大変だよ！ 仲良さんのジャージが、水浸しで水飲み場に……！」

「ええっ！？」

椅子から飛び上がるように立つと、薪のあとを追って教室を出る。水飲み場は一年六組の教室の真正面にある。

そこには、何人かの生徒たちが集まっていた。

そして彼らの目の前、水道が並ぶ水飲み場の上にある窓に、びしょびしょに濡れた、「16 仲良」と名前の書かれた布が縫いつけられている友樹のジャージが、広げた状態で貼りつけられていた。

「さすがに、ひどいよな……」

水飲み場の前に集まっていたクラスメイトがひそひと話す声が、友樹の耳に微かに漏れ聞こえてくる。

「そうだな……。こんなことをするような奴には見えなかったのに……」

その話の流れに、友樹は思わず耳を傾ける。

「たまに仲良さんと話したりしてたし、仲が悪いわけじゃないと思っただけだな、光林さん……」

——光林さん……。

ある程度予想していた部分はあったものの、クラスメイトのつぶやいた名前に、友樹は愕然となった。

瑞菜が犯人だろうと、ほぼ確信に至ってはいたものの、確証まではなかった。

なにかの間違いであってほしい。友樹としては、そう思っていたのだ。

しかし、その微かな望みは、もろくも崩れ去った。
涙が、溢れた。

「仲良さん……」

薪は心配そうな視線を向けるものの、どう声をかけていいかわからないといった様子だった。

「……ジャージ、取らないと……」

よろよると水飲み場の窓に近づいていく友樹に、

「あ……おれが取るよ」

やっと声を上げた薪は、水飲み場の土台に足をかけると、窓に貼りつけられたジャージをはがす。

ジャージは、表側の肩口や襟、裾などにガムテープを貼りつけた上、裏側にも輪っか状にしたガムテープが何ヶ所かにつけられ、窓に固定されていた。

水に濡れているのはジャージの表側だけだ。

ということは、窓に貼りつけたあと、水道の蛇口を上に向け、指で押さえるなどして狙いを定めて水をかけたのだろう。

現に、ジャージの周りの窓も水に濡れ、その雫は下の窓枠に向けて流れ落ちていた。

瑞菜は今まで隠れて嫌がらせをしていた。

今回も、誰も周囲にいないことを見計らって行動を起こしたに違いない。

だが、突然男子生徒たちが現れ、逃げるようにその場を去っていた。

そういつことなのだと考えられた。

「……ほら……」

「ありがとう……」

薪からジャージを受け取り、小声でお礼を述べる友樹。その声のトーンは、当然ながら沈んだままだ。

「これ、光林さんがやったのか……」

さっきのクラスメイトの話を、薪も聞いていたのだろう。つぶやきをこぼす。

「こんなことするような子じゃないはずなのに……」

その声は、とても悲しげだった。

友樹に対する哀れみの念も含まれてはいただろう。

しかしそれよりも、別の想いのほうが強いように、友樹には感じられた。

(……杉崎くん……)

まだ涙に濡れた瞳を向ける友樹に、薪は優しげな表情を返していた。

と、すぐに薪は、はっとした顔になる。

「あつ、おれ部活だった！ ごめん、もう行かないと……。仲良さん、大丈夫？」

「うん、大丈夫。心配してくれて、ありがとう」

走り去っていく薪の姿が見えなくなるまで、友樹の視線は彼の背中を追っていた。

水がビシャビシャと跳ねる

友樹がジャージをしぼって溢れ出た水だ。

ジャージは、かなりの量の水を吸い込んでいた。

（ふう……。こんなもんかな……）

とりあえず力の限りしぼりきって、友樹は息をつく。

もちろんまだ濡れているものの、雫が流れ落ちたりしないほどにはなっていた。

（教室の窓を開けて、風に当てて乾かすしかないかな……。それともすぐに家に帰って、ドライヤーを使ったほうがいいかな……）

友樹は沈んだ足取りで教室のドアを開ける。

中にはもう、誰もいないはず――。

友樹はそう思っていたのだが。

「友樹ちゃん、大丈夫？」

不意にかけられた優しい声。

すがりつきたいときに、そこにいてくれる友達の姿を、久しぶりに見つけることができた。

思わず友樹の目に、熱い雫が溢れ出す。

「……ねみちゃん……！」

冷たいジャージを握りしめたまま、友樹はねみに駆け寄り、すがりついた。

そして、わんわんと大声を上げて泣いた。

「ねみみちゃん！　ねみみちゃん！　うあああゝゝん！」

大粒の涙をぼろぼろとこぼしながら、ねみみの名前を連呼して泣きじゃくる友樹。

そんな彼女の髪の毛を、ねみみは何度も優しく撫で続けた。

「光林さんまで、ボクのことを……！　なんかもう、誰も信じられないよ……！」

ずっと心の奥に溜め込んで、我慢し続けてきた思いが、滝のように言葉となって流れ出てきた。

ねみみはただただ、黙って友樹を抱きしめ返す。

「松園寺さんも、ボクのことを嫌ってるみたいだし！　……ボクもう、生きてるのが、つらいよお……！」

そこまで思い詰めていたなんて、誰も考えはしなかっただろう。いや、泣きじゃくりながら思いのたけをしぼり出した友樹本人でさえも、自らの言葉に驚いているくらいだった。

そんな友樹に、

「バカッ！」

ねみみは突然大声をぶつける。と同時に、バシッ！

大きな音を響かせて、ねみみは友樹の頬に平手打ちを食らわせた。

「死んだって、どうにもならないよ。だから、そんなこと言っちゃ、ダメですねん」

叩かれた頬を手で押さえ、友樹は呆然とした表情を返す。

「……帰ってジャージ乾かさないと……」

彼女はふらふらとカバンをつかむと、ねみみに背を向けて歩き出した。

教室のドアに手をかけ、閉めて出ていく瞬間、

「……ありがとう、ねみみちゃん」

そうつぶやきを残して、友樹はとぼとぼと廊下を歩き去っていった。

その様子をじっと見つめていたねみみ。

「ふふふ……」

教室にひとり残された彼女は、なぜか微かな笑い声を漏らしていた。

どんよりと曇った梅雨空が広がっていた。
雨は降っていないものの、少々肌寒いくらい。

今日、ねみみは休みだった。

風邪でもひいたのかな。

そう考えているのか、クラスメイトは誰も不思議がっていない。
しかし、友樹だけは彼女が樹の精霊だということを知っている。

この教室の中だけでしか存在できないと言っていた彼女。
だから、ねみみが休みだなんて、普通ならばありえないはずなのだ。

それなのに、今友樹の後ろは空席だった。

樹の中で眠っているのか、ねみみが姿を見せないことは今までにもあった。

だがそれは、放課後の誰もなくなった教室でのこと。

こうやって授業中にねみみがいなかったというのは、友樹が彼女と出会ってから初めてだった。

友樹は言い知れぬ不安を感じていた。

そしてそんな彼女の机の中には、汚れた乾拭き用の雑巾が詰め込まれていた。

友樹は黙ってそれを取り出し、床に置く。

濡れていないだけマシではあるが、それでも汚れは手やノートなどに付着してしまう。

さらにそれらのノートは落書きで埋め尽くされ、教科書はロツカ

ーやゴミ箱やベランダなどに捨てられていた。

あまり騒ぎにならないための配慮なのか、すぐ見つかる場所にあるとはいえ、自分の持ち物が捨てられているという現状。

友樹の心は、どん底まで沈んでいた。

ねみみがいれば慰めの言葉くらいかけてくれただろうが、彼女はいない。

そして他のクラスメイトは誰も、友樹に話しかけはしなかった。

少し前までは、友樹をからかうため頻繁に声をかけていた薪と優助さえも、今日は視線すら合わせない。

彼らが寄ってきていたのも、ねみみがいたから——つまりは彼女の精霊としての力だったのかもしれない。友樹はそう思って、さらに沈んだ気持ちに落ちていく。

ふと周りに目を向けると、瑞菜が友樹のほうに視線を向けていた。だが友樹と目が合うなり、彼女は慌てて目を逸らし前に向き直る。

（やっぱりこの嫌がらせ、光林さんがやってるんだ……）

悲しみと苦しみを耐えながら受ける授業の内容なんて、頭に入らずがなかった。

「ふふふ、よく来たわね。最近はどうかしら？ 元気にしてる？」

冬野がいつもの腕組みスタイルで友樹に視線を落とし、いやらしい笑みを浮かべながら問いかけてくる。

場所はもちろん、いつもの屋上へと出るドアの前。
時間もいつもどおり、放課後となっていた。

「……どうって、なにがですか……？」

友樹は懸命に強がって言葉を返す。

瑞菜からと思われる嫌がらせは、ジャージの件ではクラスメイトに姿を見られていたものの、他の件については確証がない。

だから彼女が犯人だとは、言いきれないのだ。

それに、ジャージの件も先生の耳には届いていないようだし、他の件に至ってはクラスメイトでも気づいていない人は多い。

ゴミ箱などに捨てられている教科書を拾う友樹の姿は目にしているはずだから、嫌がらせ行為があること自体はクラスメイトも気づいているだろう。

しかし、犯人が誰かというところまでは、わかっていないはずだ。みんな関わり合いになりたくないと考えているのか、余計な詮索はしないようだった。

だからこそ、わざわざ呼び出して、どうかしら？ などと訊いてくる冬野には、疑問を感じなくもない。

もつとも、以前からこうして呼び出されていじめられていたのだから、さほど不自然というわけでもないのかもしれないが。

だが、こんなふうに訊いてくるといことは、友樹が嫌がらせを受けている現状を、冬野が知っていることを示唆しているとも言えるだろう。

「ちょっと、大変そうじゃない？」

そばに控える取り巻きたちとともに、ニヤニヤと笑いながら言う

冬野。

示唆している、どころではない。これは確実に、知っている――。
友樹はそれを悟った。

しかし、だからといって、彼女たちがそれに関わっているとは限らない。

「……どうしてそう思っんですか？」

冬野を睨み返ししながら、友樹は質問を返す。

誘導尋問といった感じで、犯人しか知り得ないことをぼろつと喋ったりしたら、冬野が黒だと確かめることができる。

そついった心理が働いたのかもしれない。

だが――。

「今なら、あたしがここであなたをいじめても、そつちの犯人に罪をなすりつけられるってことよ！」

そつ言い放つと、冬野は取り巻き三人組に合図を送る。

「冬野の命令だからさ、悪く思わないでよねっ！」

笑顔を浮かべて唯がそつ言つと、すかさず残りのふたりが友樹のことを押さえつける。

背後から幸緒が羽交い絞めにし、美春が両腕を押さえていた。

「ちよつと……！ やめて、ください……っ！」

身をよじって逃れようとするも、非力な友樹ひとりの力では、その抵抗も意味をなさない。

友樹は身動きも取れなくなるっではいたが、それでも冬野を睨み返す。

「ボクが、松園寺さんたちが犯人だって告げ口したら、それで終わりだよ!？」

「そうね……。だからこそ、そういう気力もなくすくらいに、徹底的にやらないとね!」

冬野はそう言い捨てると、友樹の制服に手をかける。

「きゃっ!？」

制服の一部が破ける音が響いた。

「あんたたちも、やっちゃいなさい!」

「ほいさっ!」

唯の手には、いつの間に取り出したのか、ハサミが握られていた。それを使って、スカートや制服の裾や袖を切り裂いていく。

「や……、やめて……! ごめんなさい、生意気言っただのは謝りますから! だから、やめ、むぐっ!」

いくら寂れた階段の上とはいえ、さすがに騒がしくなっただけはマズいと思ったのだろう、背後から組みついてきた幸緒が友樹の口を押さえる。

「んんん~~~~、んん~~~~!!」

涙を浮かべ、声にならない声で、やめて、と懇願する友樹。

もちろんそんな願いが届くはずもない。

ひとしきり友樹の制服を切り裂いたり引き裂いたりしたあと、彼女たちはすつと立ち上がった。

泣きながら倒れ込んでいる友樹を見下ろし、冬野は満足気な笑顔を浮かべる。

「こんなもんね。仲良さん……、それじゃ、またね」

彼女はそうつぶやくと、取り巻きたちとともに階段を下りていった。

さつきまでの喧騒が嘘のように静まり返った、屋上へと出るドアの前のスペース。

昼休みの終わりを知らせる予鈴だけが空しく響いていた。

友樹はふらふらと立ち上がり、今の自分の姿を見下ろしてみる。制服は上着もスカートもハサミで切り裂かれ、太ももや腕があらわになっていた。

中に着ていたインナーにも、かなりハサミが入れられてしまったようで、おなかや背中白い肌までもが露出している。

冬野たちは下着にまでは手を出さなかったものの、それでも今の姿のままでは、人目に触れるわけにもいかないだろう。

「こんな格好じゃ、教室にも戻れないよ……」

冬野は去り際に、またね、と言い残した。

つまり、これからもまた、同じようなことをされるということだ。そう考えただけで、友樹の瞳には再び涙の雫が溢れ出してくる。

「ボク……もう、ダメ……」

彼女はふらふらと、なにかに導かれるかのように、屋上へとつながるドアのノブに手を伸ばしていた。

普段、そのドアはカギが閉められていて、開けることができないはずだ。

しかし――。

カチャッ。

ギイイイイイ……。

開けられることが少ないからか、鈍い音を立てながらも、ドアは友樹を招き入れるようにすんなりと開いた。

屋上から吹き込む風が、友樹の短い髪と切り裂かれたスカートをなびかせる。

さあ、おいで。

空を厚く覆い尽くす灰色の雲が、友樹をいざなっているかのよう
に、広く深く、彼女の心に両手を伸ばしてくる。

ゆっくりと、一步一步、屋上の端に近づいていく友樹。

もちろん、屋上はフェンスで覆われていて、下に落ちることがな
いように設計されていた。

しかし友樹は、そのフェンスをすると登っていく。

かなりの高さがあり、上のほうは若干内側に向かって斜めになっ
ているというのに、友樹はなんの苦もなくフェンスを乗り越えた。

フェンスの外側は、数十センチくらい足場となるコンクリート部
分があるものの、その先はもう、なにもない空間だ。

一歩足を踏み出せば、真っ逆さまに落ちていくだろう。

そんな屋上のへりに立ち、友樹が視線を落とすと、吸い込まれそ
うな景色が友樹の目の前に広がる。

中庭の地面が、自分を呼んでいるようにすら感じられた。

とはいえ、さすがに足がすくむ。

楽に、なりたい。

でも怖いし、それに痛そう……。

友樹の最後の葛藤が、胸のうちに続いていた。

（生きていれば、いいことあるかな……？）

肌寒さを感じさせる風が友樹をかすめゆく。

風は友樹の心を穏やかにしてくれるのか、それとも……。

（でも、今まで頑張って生きてきて、結局、ボクはこんな状況にな
ってる……）

友樹は首を下げ、視線を自分の制服へと向ける。

彼女の目には、ビリビリに切り裂かれた自分の制服がはつきりと
映っていた。

（松園寺さんたちに目の仇にされて、光林さんにまで裏切られて……）

どうやら中庭にいた生徒が友樹の姿に気づいたらしい。屋上を指
差しながら、なにかを叫んでいるようだった。

しかし、そんな声も今の友樹には届かない。

（そして、ねみみちゃんも現れなくなった。もうボクに手を差し伸
べてくれる人なんて、いないんだ……）

自分の考えが、余計に自分の心を追い詰めていく。

友樹には、止め処なく流れ出る涙を抑えるすべも、見つけること
ができなかった。

（もう……こうするしか、ないよ……。みんな、さよなら——）

ふわっ。

友樹の小柄な体が、湿った風に抱きすくめられるかのごとく、宙を舞った。

スローモーションのように彼女の足が屋上のへりを離れると、そのまま、地面へとまっすぐに吸い寄せられていく。

冷たそうな地面が、どんとどんと近づいてくる。

ドサッ、バキバキバキッ！

大きな音を轟かせる頃には、友樹の意識はすでに失われていた――。

次に目を開けた友樹が最初に見たのは、病院の真っ白い天井だった。

友樹は救急車に乗せられて病院に運び込まれたものの、大事には至らなかった。

四階建ての校舎の屋上から飛び降りたというのに、かすり傷やちよつとした打ち身はあったものの、ほぼ無傷と言っている状態だった。

校舎を貫く吸血樹と呼ばれる大樹の枝が、壁を突き破り中庭にまで飛び出していたからだ。

その枝と葉がクッションになってくれたおかげで、友樹は助かった。

「枝に引っかかったからかな？ 制服もビリビリに破れていたけど……でも、あなたが無事で、ほんとによかったわ」

友樹の母親が涙をぼろぼろとこぼしながら、一緒に安堵の声もこぼし続けていた。

どうして飛び降りたのか。

母親は訊いたりしなかった。

ただ涙を流し、友樹を抱きしめた。

友樹は、本当のことを言おうか迷ったが、余計な心配をかけたくはなかったのだろう、黙っておくことに決めた。

次の日、友樹は退院した。

一旦家に戻ると、友樹は母親と向き合い、これから学校に行くと告げた。

時間は午前十時ちょっと前。今すぐ向かえば、三時間目からは授業に出られるだろう。

「……行かないほうが、いいんじゃない？」

心配そうに友樹の顔をのぞき込む母親。

友樹は黙っていることに決めていたものの、どんなことがあったのか、薄々は気づいているのかもしれない。
だが友樹は、

「ううん、大丈夫だから」

そう明るく答えると、用意してもらっていた新しい制服に着替える。

「それじゃ、行ってきます！」

大きく手を振って玄関を出ると、友樹は軽やかな足取りで学校へと向かうのだった。

友樹は、ちょうど二時間目が終わり、休み時間になった教室へと入っていった。

「……おはよー……」

少し遠慮がちに挨拶の声を上げる彼女。

すると、何人かのクラスメイトが彼女の周りを取り囲む。

「仲良さん、大丈夫なの？」

瑞菜がとても心配そうな、それでいて友樹の姿を見て安心したと
いうような表情を浮かべながら、声をかけてきた。

友樹は、いろいろと嫌がらせをしていたのに、と思わなくもな
ったが、とりあえず微かな笑顔を返す。

「わたし……、その、ごめんね、仲良さん！ ……えっと……」

他のクラスメイトも集まってきたため、一瞬躊躇していたも
の、瑞菜は友樹の耳に口を近づけ、小声でささやくように訴えか
けた。

「わたし、松園寺さんに、仲良さんが、その……杉崎くんを、狙っ
てるって言われて……。ふたりきりで、夜な夜な会つてるところを
見たって……。それで……。その……。本当にごめんなさい……」

「え……？ ボク……ボク、そんなこと……」

友樹は困惑の表情をさらしたまま、ささやき返す。

思えば瑞菜は、友樹のそばに薪がいるときに話しかけてくること
が多かった。そのことを友樹は思い出した。

つまり瑞菜は薪のことを想っていて、友樹に嫉妬して嫌がらせを
していたのだ。

「昨日、杉崎くん本人にも話したんだけど、そんなこと、あるわけ
ないって……。よく考えれば、すぐわかるはずなのに……」

「ごめんなさい、ごめんなさい。」

ひたすら頭を下げる瑞菜。

「悪いことだとわかってたけど、どうしても止められなかった。だから許してなんて言えないよね……」

「……もう、いいよ。ボクは、大丈夫だから」

泣きじゃくる瑞菜を、友樹は穏やかな表情でそっと抱きしめ、彼女の謝罪に応える。

他のクラスメイトにも、会話の内容は聞こえてしまっていただろう。しかし誰も、ふたりのやり取りに口を挟んだりはしなかった。

「……おれたちも、心配してたんだ。でも、こうやって来てるんだから、大丈夫なんだよな？」

瑞菜が落ち着きを取り戻して友樹から離れるのを待って、優助が話しかけてきた。

「うん。大丈夫だよ」

まだ少し陰りはあったかもしれないが、友樹は精いっぱい笑顔を返す。

「よかった」

薪もまた、心からの安堵の息をついていた。

友樹が元気だからということだけでなく、屋上から身を投げた直接の原因ではなかったにしても、嫌がらせを続けていた瑞菜に関する安堵の意味も、彼の表情の中には含まれていたのかもしれない。

「仲良さん……あの……」

ふと、おずおずと声をかけてきたのは、冬野の取り巻きである、唯、幸緒、美春の三人だった。

「わたしたちも、その……ごめんなさい……」

素直に頭を下げる彼女たち。

表面上だけ、口先だけ、といった雰囲気ではなく、心からの謝罪だということは、友樹にも感じられた。

「……うん……」

そんな彼女たちにも、穏やかな笑顔を返す友樹。

と、取り巻き三人の背後で、いつもどおり腕を組みながら立っていた冬野が口を開く。

「……ふん！ あんたなんて、戻ってこなければよかったのに」

微かに声が震えていたが、彼女はそう言い捨てた。すぐにクラスメイトたちからの反撃を受ける。

「松園寺さん！ そんな言い方、ひどいよ！」

「だいたいお前、仲良さんのことを嫌ってるみたいだったよな！ 今回のことだって、お前のせいなんじゃないのか！？」

自分に向けられる怒りの声で、さすがの冬野も怖気づいているようだった。

実際のところ、彼女のせいだというのは正しいわけだから、反論もできない。

「冬野、あんた、そんな言い方ないよ！ 素直になりなつて！ ……わたしたちと一緒に、ずっと心配してたじゃない……」

唯も声を荒げる。

しかし他のクラスメイトとは違い、冬野をなだめようとする優しい想いが、その言葉には乗せられていた。

「な……なによ！ べつにあたしは……！ ふんっ！」

冬野は顔を真っ赤にして、足早に自分の席へと戻ってしまった。そんな彼女の様子を見て、友樹は苦笑をこぼす。思いのほか、余裕があるようだ。

そろそろ休み時間も終わる。集まっていたクラスメイトたちも、それぞれ席に戻っていった。

席についた友樹は、すぐ後ろの席に視線を送る。

（……ねみみちゃんは、いないんだ……）

友樹が寂しげな表情を浮かべる中、三時間目の開始を告げるチャイムが鳴り響いた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1431y/>

ねみみに水の吸血樹

2011年11月3日00時58分発行